



特別史跡
一乗谷朝倉氏遺跡ⅩⅦ

昭和59年度
発掘調査
整備事業概報

福井県立朝倉氏遺跡資料館

はじめに

昭和59年度の発掘調査は、昨年度に引きつづき城戸ノ内中央部、一乗谷川西側の奥間野、吉野本地係で実施しました。これまでの調査でこの地区には、多くの町屋や寺院の跡が発掘されていますが、今回の調査で新たに、土塁で囲み、門を構えた中級程度の武家屋敷の跡が検出されました。またこの地区では三条目の幅広い東西の幹線街路が確認されました。105m前後のほぼ等間隔に配置されており、戦国城下町の計画的な町割の一端がうかがわれます。

また武家屋敷跡からは、朝倉氏遺跡でははじめての黒漆で書かれた将棋の駒や源氏香の記号をデザインした蒔絵の櫛などが出土しましたことから、都に劣らず城下町一乗谷では文化的遊芸が盛んであったことがしのばれるのであります。

昨年度には、武家屋敷の復原整備も完了し、多くの方々に見学いただいておりますが、本年度は遺跡公園センターの周辺を整備いたしました。第44次発掘調査地は遺構の遺存状況がよく、これまでと同じように礎石や溝などを露出展示する保存整備をしました。また公園センター駐車場の西南側には、仮駐車場の機能を備えた礫混りソイルセメント舗装の広場を造成しました。この地区は公園センターを核として、新たな史跡の見学拠点になろうかと存じます。

なお館前の電柱を撤去し、史跡景観の保全と芝生広場利用者の便宜もはかりました。

本年度の事業の実施にあたり、種々ご指導、ご協力をいただきました文化庁、特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡調査研究協議会、福井市教育委員会などの関係各位、ならびに城戸ノ内町をはじめとする地元の皆様に心から感謝申し上げる次第であります。

昭和60年3月

朝倉氏遺跡資料館長 藤原武二

目 次

は じ め に

第 49 次 調 査

発掘された遺構.....2

発掘された遺物.....5

第 50 次 調 査

発掘された遺構.....11

発掘された遺物.....15

第44次発掘遺構整備工.....21

公園センター南整備工.....22

P L . 1 カラー写真

P L . 2 第49・50次調査区全景（空中写真）

P L . 3～P L . 7 第49次調査・遺構

P L . 8～P L . 13 第49次調査・遺物

P L . 14～P L . 17 第50次調査・遺構

P L . 18～P L . 22 第50次調査・遺物

P L . 23・P L . 24 第44次発掘遺構整備工

第 1 図 発掘調査・環境整備位置図

第 2 図 第49・50次調査・遺構全測図

第3図～第5図 第49次調査・遺構

第6図～第10図 第49次調査・遺物

第11図～第13図 第50次調査・遺構

第14図～第18図 第50次調査・遺物

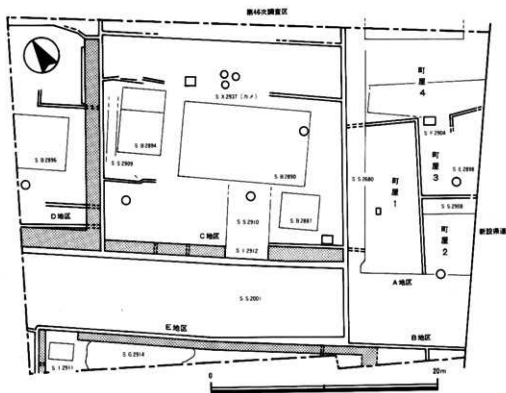
第19図・第20図 第44次発掘遺構整備工

第 21 図 公園センター南整備工

第 49 次 調 査

第49次調査地は、福井市城戸の内町奥間野地籍の東南部の地点にあり、約1300㎡を対象とした。すでに北は第46次調査、東は第36次調査が実施されており、西は第50次調査、南は昭和60年度の調査予定地である。この地区一帯は、過去6年間の調査で、東西あるいは南北方向の道路によって整然と区画された中に、寺院跡と町屋跡が多く検出されている所である。今回の調査は、発掘区を面として掘ることによって、以上の成果である寺町の様相の全体像をより明確にする資料をえることに目的があった。調査は、昭和59年5月1日から同年8月15日まで実施し、11月6日には、ヘリコプターによる空中写真測量を行い、遺構平面図の成果をえて全て終了した。

本調査の成果の第1は、東西道路S S 2001の発見である。これで幹線道路は3本となり、一乗谷城下町の都市プランを比較研究する資料が1つ増えたことになった。第2は、東西道路の南・北で検出された土塁を有する屋敷が、中級程度の武家屋敷に比定されることであった。この地区より以南では、寺院より武家屋敷が徐々に増える傾向が充分想定できそうである。



挿図-1 第49次調査区略図

発掘された遺構（PL. 1～7. 第1～5図）

この調査区は、道路や溝、土塁などによって大きくA～Eの5地区に分けることができる。発掘区の南よりで検出された東西道路SS2001を中心にみていくと、その北側には東からA地区一町屋群、C地区一武家屋敷、D地区一武家屋敷がみられ、A・C地区の間には南北道路SS2680が、SS2001に「T字型」にとりついている。また、南側にはB地区一町屋群、E地区一武家屋敷が位置している（挿図-1）。

検出した遺構は、道路5、溝21、暗渠と樋9、土塁4、門2、礎石建物16、庭1、井戸6、石積施設5などであった。ここでは、区画割に関係する道路や溝の遺構をまず解説し、次に、各地区ごとにその主要な遺構についてみていきたい。なお、方位は説明の都合上、東北方向を北とした。

SS2001 この道路は、第36次調査の時一部検出されており、道路面が3層であること、南辺に側溝SD2022をもつこと、幅約5.5mであることなどが判明している。今回の調査でもA地区では、やはり側溝は検出されなかった。道路幅は、東端で6.2m、西端で6.5mを測る。中央部に設けたトレンチによって、道路は0.88mの厚さで積上げられており、砂利層は6面あり、それより下層は、暗灰色粘土層で、数本の丸太杭が打ち込まれていることがわかった。なお、SS2001と、北方のサイゴ寺南の東西道路SS494との心々距離を南北道路SS495地点で測ると104.95mあり、1間＝6.3尺として55間という完数がえられるようである。

SS2680 この道路は、第40・46次調査でも検出されている。SS495やSS2001に接続しており、大通りに面していない町屋をつなぐ小路と考えられる。西辺は溝SD2699、東辺は石列である。トレンチの結果、道路は0.62mの厚さで積上げがおこなわれ、砂利層は10面確認できた。石列も、積上げの際その都度積み上げられたようで、5石程度確認できた。

SD2860 この溝は、SS2001の南辺側溝である。幅約0.5m、深さ約0.9mあり、西から東へ流れ、SD2699に接続している。南壁は、E地区の土塁SA2878である。なお、西側の3分の2は、下層の溝の方位が若干ずれていたため、上層部のみを検出に終わった。

SD2863 この溝は、SS2001の北辺側溝である。幅約0.7m、深さ約1.3mあり、東でSD2699に接続している。北壁は、C地区土塁SA2880とD地区土塁SA2881であり、道路面より高く積まれている。側石は、3時期にわたって積まれている。下段は0.15mほど張り出しており、D地区北壁は素掘りであったようである（第5図）。その後中段の石垣が積まれ、最終的には、この溝は全て埋められ、東側の石列のみみられるように幅約1m、深さ約0.2m程度の簡単な溝となったようである。

SD2022 B地区を限る溝で、SD2860に接し、東方へ流れている。幅0.2mと狭く、主溝SD2860、2699に対して副溝的役割を果たすものと考えられる。

S D 2699 この溝は、S D 2860・2863と接続しており、南から北へ流れ、第46次調査区のS D 2699の溝と合流して、S D 2695の溝に排水されていたようである。幅約 0.5m、深さ約 1.3m あり。東壁は積上げ作業が徐々に前へせり出して行われたため、下段の検出はできなかった。

S D 2872 この溝は、C地区とD地区を限る溝で、S D 2863に接続して北へ流れ、第46次調査区のS D 2703につながっている。幅約 0.4m、深さ約 1.1mあるが、東壁は、ほとんど崩れてしまっている。

A地区 (P.L. 3・4 第3図 挿図-1)

町屋1 敷地は、S D 2864で囲われている。S S 2001に面して、地口5m、奥行約13.5mを測る。敷地の南・西辺は、道路面が積上げられるたびに石列を積み足しており、北・東辺の溝S D 2864も同様である。上層は削平されているが、S B 2883、S F 2903が検出できた。中層では、S X 2928・2930などの遺構がみられるが、これも残りが悪い。下層のS B 2884は、礎石や掘立柱はなく、炭層の生活面を検出したにすぎない。この建物の北半分には、約 0.2m低い位置でS X 2929の石敷が検出できた。石敷の北辺は、こぶし大の石を、面を内側にむけて4・5段階度積んであることから、S B 2884と同一時期の遺構と考えることができる。

町屋2 敷地は、S S 2001に面しており、S S 2908とS D 2864で囲われている。地口約10m、奥行 5.5mであるが、礎石は検出できなかった。建物の北辺には、通路S S 2908がとりついている。井戸S E 2897は、道路S S 2001側へ一部張り出して掘られている。

町屋3 S D 2172・2183・2864で囲われた敷地であるが、建物等は不明である。井戸S E 2898の上部は、後世に直径約 1.8m、深さ約 1.7mの穴でつぶされており、その埋土の中から「西厳寺」銘を陰刻した石製盤が出土した。石積施設S F 2904も、石が崩れてしまっていた。

町屋4 敷地は、S S 2680に面しており、S D 2183・2864より北方に位置する。地口約12.5m、奥行14.5mと広く、建物も第36次調査でS B 2043、46次調査でS B 2710が検出されている。ここは、礎石もかなり上・下層のものが重複しているため、1棟か、数棟が繋がっているのかは、今後詳しく検討しなければならない。

B地区

この地区は、S D 2022に面しており、町屋が2軒検出された。しかし、ほんの一部分のみの検出であったため、西側の町屋の地口が6mであること以外、不明という他ない。

C地区 (P.L. 3~5 第2・4・5図)

C地区は、武家屋敷と考えられ、地口21.5m、奥行19.3mのほぼ正方形の敷地である。面積は 415㎡と、中規模程度であり、屋敷の南はS S 2001、東はS S 2680、西はS D 2872、北はS D 2868で画されており、南辺にのみ土塁が検出された。土塁の中央やや東よりの所で門S I 2912が検出されたことから、この屋敷は、道路S S 2001に面していたことがわかる。生活面は、およそ4面検出できた。耕作土より下の床土面上には、一面に薄く小砂利が敷かれており、そ

の際に検出した S A 2880、S D 2870、S V 2683、S B 2889・2893、S E 2899・2900・2901、S F 2906、S X 2937・2934などの遺構を第1面とする。第2面には、S D 2866、S B 2887、S F 2905などが相当する。第4面以下は、S D 2868・2869などがみられる。今回検出した主たる生活面は、第3面であり、以下その遺構を中心にみていくことにする。

S A 2880 幅 1.2mの土塁で、裏込めにガラ石が多くつまっていた。東南隅の巨石は、通称で「おこり岩」といわれている。中央から西側の土塁は、明確ではなかったが、暗渠 S Z 2919・2941などがあることから、南辺全体は土塁と考えられた。

S I 2912 「おこり岩」から7m西に位置しており、幅 2.1mある。第3・4面の時期の門であり、第1面の時期には閉塞されていた可能性がある。門は、たちわって調査しなかったため、建物構造などは不明である。

S S 2910 門 S I 2912の正面にあり、幅約 3.7mにわたって小砂利が固く敷かれていた。縁石列も検出できたことから、敷地内へ入る通路と考えられる。

S B 2890 敷地内のほぼ中央で、東西11.43m(6間)、南北6.68m(3.5間)の規模の礎石建物を検出した。建物の北辺には、礎石脇に立石が縁石状に並べられていることや、周囲に、コブシ大の石を帯状に配石していることなどから、これ以上建物は拡げられないものと思われる。溝 S D 2867は、S B 2890の雨落溝と考えられる。礎石面には、多く線刻が施されており、柱据え付けの際の基準竿が、1間=6.25尺から6.3尺のものを用いていたことがわかる。この建物は、同じ時期の遺構面より約 0.3m深い所に築かれており、その後、青色粘土で一度に埋められ、S B 2889が同じ位置に、同じ規模で建てかえられたと考えられる。S E 2900も後で掘られている。羽子板、黒漆書きの将棋の駒、蒔絵の櫛などの木製品が、建物西辺部から出土した。

S B 2891 東西4.35mで南北 2.5m分を検出した。S B 2890の裏に位置し、方位も S B 2890と同じである。S F 2906・大甕埋設遺構 S X 2937などは、第1面である。

S B 2894 敷地の西側にあり、東西3.78m(2間)、南北5.67m(3間)を測る。2間四方の建物で北へ1間分の庇がとりついている。2間四方の建物礎石は、1間の4分の1づつに線刻が施されており、1間=6.25尺の完数が得られた。建物内には、厚さ 0.2m程度に小砂利が敷かれており、その下の黄色土を若干掘りくぼめて、南北方向に4本の根太 S X 2936が据えられていた。S S 2909は、通路で、S D 2871は、この建物の雨落し溝である。建物の小砂利層からは、鎌4本、ノミ1本、将棋の駒1点などが出土し、倉庫あるいは、作業所であろうと考えられる。

D・E地区(PL. 7)

D地区は、第50次調査の報告(50次一A地区 S B 2896の項)で述べることになるので、ここでは、土塁 S A 2882の内側で、大ぶりの土師質皿2枚が曲物に収められて出土したことだけを付記しておく。E地区は、土塁 S A 2878や、西北隅に薬医門 S I 2911、庭 S G 2914などをもつ武家屋敷であるが、昭和60年の第51次調査で、その全貌が明らかとなるであろう。

発掘された遺物

今回の調査で出土した遺物は総点数25,522点上る。内訳は越前焼 4,972点、瀬戸・美濃焼 608点、土師質土器（瓦質含む）16,231点、中国製陶磁器 1,749点、木製品875点、金属製品553点、石製品 242点、その他 292点である。その出土傾向は各次数の調査区と概ね同様の比率を示す。これをひとつの調査区内で微視的に捉えて見た場合、数量的な資料操作の方法がどこまで可能であるのかという視点に立って整理作業を実施してみた。なお、具体的な操作方法については日本貿易陶磁研究会1984「貿易陶磁研究 No.4」に多くを負った。

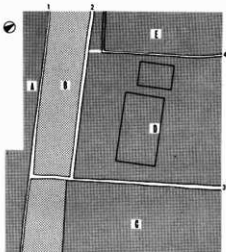
挿図2は遺構の性格が異なると見られる範囲を調査区内で更に細分した模式図である。粗目のアミで示した区画Bが調査区を東西に走る道路SS2001、細目のアミで示した区画A・C・D・Eが武家屋敷及び町屋の建物群と見られる部分で白く抜いた4本の溝1SD2860、溝2SD2863、溝3SD2699、溝4SD2872でそれぞれ区切られている。なお、遺物整理の都合上、区画Eより出土した土塁以内の遺物については隣接する50次の調査区にまたがることから50次で扱うことにし、ここでは省いておく。

それぞれの区画及び溝より出土した遺物について、陶磁器の中から特定の器種に限って出土点数を示したのが表-1である。a・越前焼、b・土師質土器、c・瀬戸・美濃焼（鉄軸・灰釉）、d・中国製陶磁器（青磁・染付・白磁）、朝鮮製陶器がある。器種は日常の食生活に関連した什器類、調理・貯蔵具に限定した。従って器種の不明な土器やその他はこの表では除外した。これらを総計すると23,164点に達し、遺物総点数の9割以上、90.7%を占めていることがわかる。

挿図3は各区画及び溝出土遺物の構成を円グラフに表わしたものである。区画Aは面積的に不十分であると判断して除外した。溝2・4も後世の擾乱・削平が著しいため任意に削除した。グラフ中のe・f・g・hはそれぞれ金属・木製・石製・その他の各遺物を示す。朝鮮製陶器はここではhに含めた。また出土率が1%以下のものについては数字は省いてある。

越前焼はカメビット群の存在などから、通常町屋地区では高い比率を示すが、町屋とみられる区画Cでは25.1%にとどまる。36次調査区にまたがっており、そこでは礎石建物に

挿図-2 第49次調査区地区割模式図



接してカメビット群が検出されているので、これを含めると比率は当然変わってくる。従って区画Cは完結した空間とはなり得ない。Bの道路では越前焼の比率は比較的高く、46.7%と道路分の遺物の約5割を占める。

土師質土器は特徴的な傾向をもつ遺物群で各地区で絶対的優位性を有している。ここでは溝の出土率が一番高い。挿図3のグラフでは全体の割合とBから溝までの出土の割合を順に示した。それぞれのグラフにおいてaの越前焼とbの土師質土器の合計が80%内外を占め、各区画ごとにaとbの比率が相対的に変動していることがわかる。

瀬戸・美濃焼は全体的に1~3%前後におさまる傾向を示し、区画別にはこれといった特徴は現われてこない。36・44・46次の各調査区では4%を超える高い出土率がみられ、集中度の差が存在するものと受けとれる。

中国製陶磁器では青磁・染付・白磁が共に1~2%台を示す。Bと溝1で青磁の比率が比較的高いのはAから耕土として後世に移動或いは分散した結果とも考えられる。ちなみに同一個体とみられる青白磁梅瓶の破片がAの土塁S A2878を中心に溝1・B・Dでそれぞれ出土している事実がある。中国製陶磁器全体では6.9%を示し、他の調査区での6~8%台と比較して

表-1 区画別出土遺物数量表

		A	B	C	D	1	2	3	4	計	
a	越前	301	428	512	896	260	215	297	46	2,955	
	壺	45	82	153	301	24	37	65	24	731	
	鉢	101	171	255	375	62	87	136	41	1,228	
	鉢計	447	681	920	1,572	346	339	498	111	4,914	
b	土師	482	480	2,027	4,793	987	3,509	3,066	586	15,930	
	土	—	4	11	27	2	17	10	3	74	
	土計	482	484	2,038	4,820	989	3,526	3,076	589	16,004	
c	鉄	碗	9	15	29	99	14	23	41	10	240
		皿	1	—	3	11	—	1	9	—	25
		鉢計	2	9	19	18	3	7	7	2	67
	灰	碗	—	—	9	24	5	6	—	1	45
		皿	14	8	45	61	7	16	31	2	184
		鉢計	1	—	9	2	1	—	—	—	13
小	計	15	8	63	87	13	22	31	3	242	
	計	956	1,197	3,072	6,607	1,365	3,918	3,662	715	21,492	
d	青磁	碗	15	9	22	54	11	14	24	3	152
		皿	20	24	25	67	23	17	19	9	204
		鉢計	35	33	47	121	34	31	43	12	356
	染付	碗	26	6	29	65	27	19	25	4	201
		皿	27	45	62	130	26	21	60	8	379
		鉢計	53	51	91	195	53	40	85	12	580
	白磁	碗	—	—	—	—	—	—	1	—	1
		皿計	97	84	88	169	63	34	128	12	675
朝鮮	碗	97	84	88	169	63	34	129	12	676	
	鉢	—	2	2	5	1	—	2	—	12	
	鉢計	5	1	8	7	3	11	13	—	48	
小	計	5	3	10	12	4	11	15	—	60	
	計	190	171	236	497	154	116	272	36	1,672	
総	計	1,146	1,368	3,308	7,104	1,519	4,034	3,934	751	23,652	

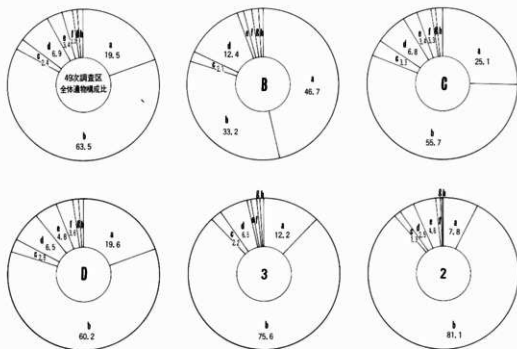
もほぼ平均的な出土傾向とみられる。白磁は今回はほぼ 100%近くが皿で占められ、その用途を伺いやすくしている。

朝鮮製陶器の主な器種には碗・壺がある。いずれも日常雑器とみてよいもので、各区画ともに 0.2%前後でおちつき、大きな変動は示さない。出土点数も60点と非常に少ない。

区画別に見た場合、Dが49次調査区全体のあり方と一番近似したパターンとなっていることが指摘できる。そして溝2では土師質土器が8割以上の出土率を示し、集中的な出土傾向となっている。このことは前節の遺構の説明でも触れたがS D2863の検出状況から溝の性格としては特異なあり方を示しており、そのことが遺物の出土状態に反映されているのではないかとの見方を強くする。また挿図3で「とした木製品がCとDにおいて 3.3%、3.6%と高くなっているが、主に下層遺構検出による結果に伴うものと見られ、遺構面の重なりを無視した、単純な区画ごとの統計方法だけではこの量差について云々できない。同様な理由で金属製品なども具体的な検討内容から省いた。今後、これらの相互比較を行ない得る遺構面ごとの出土遺物の操作方法を検討してみたい。遺物組成を考える上で陶磁器以外に金属・木製品等を省くことはできない。しかし、木製品は特に陶磁器類との間に遺存状態の本質的な違いがあるとの指摘（小野正敏1984前掲）や、実際の整理上のカウント自体に多くの問題点をのこし、パラレルな比較資料とはなり得ていないのが実情である。表-1で省いた一因もここにある。しかし、可能な限りこれらを比較対象の組上りにのせる方法を模索して行かねばならない。

挿図-3 区画別出土遺物構成比

(数字単位 %)



図版に示した遺物には土師質土器、瀬戸・美濃焼、中国製陶磁器そして金属、木製、石製の各種遺物がある。特徴的なものを拾いながら以下に説明を加えていく。

瀬戸・美濃焼

(1)は茶入の蓋と考えられる小型品で径 3.2cmをはかる。底部は糸切り痕がのこる。(2・3)は共に鉄釉の水滴である。これらの遺物は溝・ピット等に落ち込んだ場合に比較的原形を保ちやすく、完形の類例は多い。(4)は灰釉の皿、(5)は同じく灰釉の碗である。共に釉流れが激しく、釉調もムラが多い。焼成は良好で器面は光沢をのこす。(10・11)は鉄釉の壺と鉢の破片資料である。

土師質土器

見込み内部に動物文を有する小皿が今回新たに出土した(6)。S D2872の下層より他の灯明皿と共に出土したが、文様を有するものは(6)のみであった。モデルは牛か馬か判然としない。2頭描かれた可能性もある。(7)は完形の土釜で胴部に煤が顕著にのこる。突帯部には通常ヘラ記号がみられるが、この資料にはない。他に底部穿孔の皿(8)がある。この種の皿は各調査区で出土例があり、孔が複数のもの、灯芯油痕がみられるものとそうでないものがあって一定しない。

中国製陶磁器

(6)が出土した同じS D2872より青磁稜花皿(13)がほぼ完形で出土した。見込み中央に釉の掻きとりがあり、内面にヘラ掻きによる圏線文及び刻花文が施こされる。また高台裏には黒漆が塗布される。この青磁稜花皿は中世の城館跡等ではコンスタントに出土するもので、時期・分布の再検討、染付稜花皿との関連に着目した論考が最近見られる(金沢陽1984「日本出土の青磁稜花皿について」)。白磁は大半が皿である。(14)はそのうちS D2699より出土したもので高台裏に線描を有する例である。焼成の前か後かは判断し難いが意図的な記号と考えられる。(15・16)は染付碗で器面一杯にそれぞれ松竹梅、唐草獅子文が描かれる。見込みには共に牡丹唐草文がみられる。(18)は鉢もしくは平碗と考えられる染付片で胴部に竜雲文、高台脇にくずれたラマ式蓮弁文をめぐる。(17)は青白磁梅瓶の破片一括資料で、出土地点は異なるがいずれも同一個体とみられるものである。類例は15次出土の遺物にみられ(概報Ⅳ)、底部径の寸法から推定して今回のものが少し大型に属す。釉調も安定して発色は良好である。

金属製品

(19)、(40~44)は飾り金具である。(19)は蔓草をあしらった透し彫りの金具で鍍金が施こされる。(40~44)の一括資料はS B2886下層炭・焼土層より出土したもので対の金具であろうと推測される。毛彫りによる桜花文、蔓草文、菊花文が鮮明にのこっており、魚子(なご)彫りで余白を充填する手法が行なわれている。(22)は長方形の銅製水滴で類例は17次にみられる。また円形の銅製水滴が36次で出土しており、水滴の資料はかなりバラエティをもつ。(20)

は鍔付金具で鍔台は菊花様の線彫りが施こされる。発火具としては(24)の火打金がある。火打石、火口(ほくち)と共にセットとして使用されるが今回は火打金のみで単独出土で他の器具は伴出してない。また、この形態は三日月形を呈し、一方の先端に紐掛け用の鉤がつくり出されている。大工道具に類したものに(25)の平鑿、(27)の四ツ目鉋がある。いずれも使い古されたものとみえて、柄の摩耗、傷みが激しい。

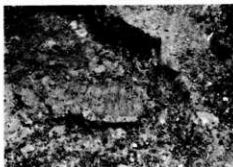
(28~36)に刀及び刀装具類を示した。(28)は太刀の足金物に相当するもので総黒漆塗りの製品である。(29)の筭(こうがい)は少し重みが見られる他はほぼ無キズの資料で身の表面に丸に花菱を3個配した浮き彫りの文様が施こされる。(30~33)は小柄の柄部、(34)は目貫、(35)は小柄で柄部に鍍金の痕跡が認められる。銘は見られない。

木製品

ここでは特記すべき事項が多い。金属製品同様、生活のあらゆる領域における遺物が見られるが、中には現在見られる生活用品と全く異なるところがないものがあって、400年以上もの間、その様式に変化がないことを知らされる。先ず将棋の駒であるが、歩・香車・金・王の4種類4枚(45~48)があり、そのうち歩の表裏は共に黒漆で「歩兵」、「と」が書かれている。一乗谷では初出の例である。次いで蒔絵の櫛(49)、木刀の鐔(51)、小刀の鞘(54)がある。更に(52)の木札が出土したが文字の判読は困難である。また(50)の墨書木製品は表裏に墨書が見られるが、書き散らした様子があり、文字かどうかは疑わしい。(55~57)、(59)は漆塗りの皿及び椀である。そのうち(56・57)の皿には高台裏に「法」、「法十」の線刻及び漆書が見られ、調査区西側の法万寺谷の地名との関連を想起させて興味深い。(61)は持ち抜き加工による粗い仕上げの舟形木製品で内面に顕著なノミ痕がのこる。(63)は茶臼の柄と考えられる。(64)は刷毛で、毛は腐蝕したのか1本ものこっていない。(65)は黒漆の箱で短辺の側板1枚分が欠失している。家具の引き出しとも考えられる。(69)は鍋蓋の把手と見られ、釘が等間隔に打ち込まれている。(68)は連歯の高下駄で表面には鼻緒を結ぶように交錯する線刻がのこる。(66・67)、(70~73)にはいわゆる1ツ目下駄を集めてみた。そのうち(66・67)は線刻による斜格子目が見られる。(67)は長9.6cmで最も短かく、(73)は長20.2cmで最も寸法が大きい製品である。規格のバラエティはそのまま使用者の足の大ききによるものと理解するのか、或いは小型の(66・67・70)を別の用途と見るのか、問題は多い。

(74)は長123.2cmをはかる鋤状木製品で一般に「コシキ」、「バンバ」などと呼ばれて北陸を中心とした積雪地帯の除雪具として近年まで使用されていたことが民俗学的にも知られている。ヒラ(刃先)の部分を面積を広く薄く仕上げている

挿図-4 草履出土状況



のは屋根雪や道路の積雪が多い場合に切りくずしながらすかすための工夫であるという（天野武1975「白山山麓の除雪具」）。類例としては44次・46次（概報XV）に見られる。(75)は敷居で残存長149.6cm、幅14.0cm、厚4.8cmをはかる。溝は3本あり、うち2本は幅1.2cm、深1.0cm、のこりの1本は幅2.2cm、深0.6cmをはかる。更に幅の狭い2本の溝には長3.8cmの杣穴が1ヶ所ずつ両端に穿たれる。これらのことから、狭いほうの溝は板戸もしくは藪戸をはめ、杣穴はそれらを止める楔をさしこむための穴と考えられ、間仕切り用とするより縁側等外部に面した位置に使用されたものとみるのが妥当であると思われる。松材が用いられており節目を多くのこす。裏面に鋸の目跡をのこす。側面は手斧ではつただけで鉋仕上げは施こされず全体として仕上げは粗雑である。

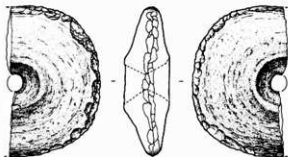
挿図4は草履の出土状況である。SB2892の下層より出土した。腐蝕が激しく、脆弱なため、取り上げに際しては硬質ウレタン・フォームで被い固めて、土ごと採取した。

石製品

(78)はSD2699とSE2898で出土した盤の接合資料で手焙りとして使用された痕跡が認められる。胴部に薬研彫りで「西厳寺」の銘が彫り込まれている。実在の寺院名が得られたのは44次「極楽寺」銘に次いで2例目である。西厳寺は西山光照寺の末寺とされ、位置は不明であった。今回の発見は調査区奥間野地係及びその付近に西厳寺が存在した可能性を示唆するものと

いえる。

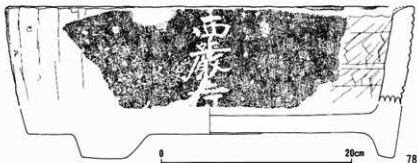
更に異型の打製石器(79)がSD2863最下層で検出された。耕作土下約220cmの青色砂礫土層で伴出遺物は出土しなかった。岩質は輝石安山岩との指摘を得た（福井県立博物館東洋一学芸員）。用途は不明である。縄文時代後・晩期及び弥生時代にみられる環状石斧の一種とも考えられる（日下部善已1983「環状石斧」）。出土状態に問題もあり、深く立ち入ることはさけておきたい。



79



挿図-5
異型石器



挿図-6
西厳寺銘石製盤

第 50 次 調 査

この調査は、第49次調査に引き続き、その西、福井市城戸ノ内町字奥間野及び吉野本の地、約1,300㎡を対象としたものである。この地区一帯は、これまでの17次・36次・40次・42次・44次・46次の各調査で明らかにされたように、当時の町割が良く残されている所で、南北方向の幹線道路に沿って小規模の町屋敷と考えられる区画がみられ、西の山裾には大規模な寺屋敷がみられる。今回の調査は、こうした調査結果をふまえ、その調査範囲を拡大し、より詳細な町割の資料を得ることを目的とした。

調査は、第49次調査を受け、昭和59年8月1日に開始し、11月6日に49・50次を合せ、ヘリコプターによる空中写真測量を実施し、実測図を作成した。その後若干の補足調査を行い現場作業を終了した。現在は遺物整理等の室内作業を進めている。ここではその概要について報告する。

発掘された遺構（P.L. 1, 14～17, 第2, 11～13図）

調査区は、第49次調査区の西、第46次調査区の南に位置し、東西約38m、南北約35mの広さを持つ。検出された遺構は、道路4、土塁2、溝12、石垣5、礎石建物10、柵列2、門1、井戸7、石積施設4等である。この調査区は、検出された道路等から大きく3つの地区に分けられ、それらの地区はさらに小区画に区分される。そこで、まず、町割の骨格となる道路等について述べ、これによって区画された地区の概要を述べることとする。なお、記述に使用する地区名、屋敷番号は挿図7に示す通りである。また、使用した方位は地図上のものと若干異り、町割の方向に従い、一乗谷川側を東、山側を西としている。

S S 2001 東西方向道路で幅は側溝を含め約7.6mである。東で南北方向の幹線道路と繋ぐといと考えられる。西端はT字形に分岐しS S 2950・2952の2本の南北方向道路となっている。この道路の断面をみても、よく叩きしめられた粘質の山土の上に砂利を敷きつめた厚さ約0.05～0.1mの層が幾層もみられるが、側溝等の他の遺構と合せ考えると、大きくは5回の改造が考えられる。この改造毎に積上げを行い最下層の道路面と最上層の道路面との間には0.8～1.0mの差がみられる。なお最下層の道路面の下に、これに先立つ若干の遺構も検出されている。また、この道路が後の字境となっている。

S S 2950 南北方向道路で幅は約3mである。東西方向道路S S 2001の西端から北へ延びる。この道路は北で2つに分岐し、一方は西へゆるやかにカーブし山の方へ向う道路S S 2951となり、他はそのまま北へ延び、第46次調査で検出されている大規模な屋敷への進入路となる。この道路は3回の改造がみられ、これは先述の道路S S 2001の中間時に対応し、当初は道路では

なかったとみられる。また最終的にも西の屋敷に取り込まれ廃棄されていたとみられる。

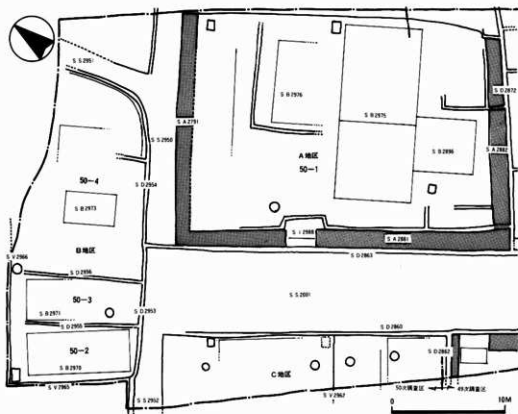
S S 2952 南北方向道路で幅は約3mであるが、西の屋敷が張り出し、S S 2001との交点附近は少し狭くなっている。道路断面をみると、東西方向道路S S 2001と対応しており、北のS S 2950とは異なり、S S 2001同様町割の基本となる道路であったと考えられる。

S D 2860 東西方向道路S S 2001の南側溝である。南側石は南の屋敷群の境となるため道路面から約0.4m高くなっている。幅は約0.3mである。道路の改修に合せ、溝も改修されている。

S D 2863 東西方向道路S S 2001の北側溝である。北の側石はこの北の屋敷の土塁の石垣を兼ねている。南は石を積まず素掘としている。しかし門の正面と西端の南北方向道路の側溝S D 2953・2954との交点附近のみ石を並べている。溝幅は当初は約0.4mであるが、後には1m近くに拡がっている。

S D 2953 南北方向道路S S 2952の西側溝である。幅は0.3～0.4mである。西の屋敷群から出る水を集め、東西方向道路S S 2001の北側溝S D 2863に排水する。

S D 2954 南北方向道路S S 2950とこれから分岐し西へ向う道路S S 2951の側溝である。幅は約0.2mであるがかなり崩壊している。道路面と西の屋敷の間には約0.3mの差がみられる。



挿図-7 第50次調査区略図

A地区 (50-1) (P.L. 15~17 第11・12図)

東西方向道路 S S 2001の北に位置し、土塁 S A 2881・2882・2791と石列 S V 2685に囲まれた大規模な屋敷である。南の道路に面する土塁の中程に門 S I 2988を開いている。屋敷の大きさは東西約30m、南北約21mである。屋敷内には建物等の遺構がみられるが、これらは大きく4期に分けられる。朝倉氏滅亡時と考えられる最終期の遺構は破壊されている点が多く井戸 S E 2984と溝 S D 2961と若干の建物礎石を残すのみである。この下層にみられるのが建物 S B 2975に代表される遺構群でこれには S B 2896・S E 2902・S F 2987等が属する。これらは屋敷内の東半に集中する。西半では、これらに先行する遺構群の一部が検出されている。建物 S B 2976に代表される一群である。S B 2975との間には約0.3mのレベル差がみられる。また、東南部を中心にトレンチを設定した所、さらに S B 2976に先行する遺構面が確認されたが一部であるため具体的な遺構は検出されていない。

S A 2881 幅約1.8mの屋敷の正面となる東西方向土塁で中程に門を開いている。この土塁は少なくとも建物 S B 2976に代表される時期には設けられていたと考えられるが、それ以前については明確でない。

S A 2882 東の屋敷との境界となる南北方向の土塁で幅は約1.2mである。内側の石垣は時期により少し変動がみられる。S A 2881と時を同じにして設けられたとみられる。

S A 2791 屋敷の西境となる南北方向の土塁である。内部は石を積まずならかな勾配をもっていたと考えられる。S B 2976の時期に設定されたとみられ、それ以前は道路 S S 2950もこの屋敷内に含まれていたと考えられる。また最終時にもこの土塁は廃棄されていたようである。

S I 2988 土塁 S A 2881に開かれた門である。土塁の開口間口は8尺であり、門の建物間口は7尺である。柱を2本とする棟門型式の構造である。蹴放を受ける狭間石も良く残っている。土塁の石垣の積み方から当初は間口10尺であり、これを改修し、高さを約0.3m上げ、8尺に縮少したことが推定される。

S B 2975 東西約7.9m、南北約15.5mの規模の礎石建物である。この建物は南北に大きく二分して考えることが出来る。南半約6.8mは基本的には土間となっていたと考えられ、幾層もの有機質の堆積がみられる。また東南の一角は一段高くなっていたとみられ、その框の一部が残っている。内部にはほとんど礎石がみられない。これに対し、北半8.7mは内部にもかなり礎石が配されており、床を持つ構造と考えられる。基本となる柱間寸法は6.25尺と考えられる。

S B 2896 東西・南北とも約4.8mの方形の建物で、S B 2975と同時期のものである。西の一部はS B 2975に入り込んでいる。南半は内部に扁平な石を敷きつめている。また周囲に石を積み上げており、周りより床面が低くなっていた可能性が考えられている。

S B 2976 全体規模は明らかでない。南北約7.2m程である。基本となる柱間寸法は6.2尺と考えられる。前述したS B 2975等の遺構に先行する建物で、南と西に雨落しの溝 S D 2959・2960

を持っている。

S F 2735・2987 石積施設である。S F 2735は最終時あるいはS B 2975の時期のものである。

S F 2987はS B 2975の時と考えられる。共に当初のものを縮小している。

S E 2902・2984 井戸である。S E 2902はS B 2975の時期のものでこの遺跡では少し特異な方形を呈している。S E 2984は最終時のもので東脇に洗場的な石敷S X 3017がみられる。

S A 2990 柵列である。S B 2975の時期のものと考えられる。掘立に面皮付の径2～3寸の榎木が配されている。

B地区 (50-2・3・4) (P.L. 17 第13図)

南北方向道路S S 2950・2952の西に位置する屋敷群である。この地区は東西方向溝S D 2955・2956によって3つの屋敷に区分され、その規模等からみて町屋と考えられる。**50-2**、**50-3**の2つの屋敷は間口約4.5mとかなり小さい。北の**50-4**は約18mと少し大きくなっている。奥行はそれぞれ石垣S V 2966までの約11.5mである。**50-2**、**50-3**の屋敷は、ほぼ敷地一杯に建物が建てられている。また正面の道路側溝S D 2953に対し、屋敷南部の一角に蓋(S X 2998・3019)がされていることから、ここに出入口が設けられていたと思われる。

S D 2955・2956 屋敷境界となる東西方向溝で、共に道路側溝S D 2953に暗渠S Z 2991・2992となって注いでいる。屋敷内の改修に応じ、これらの溝も改修されている。

S V 2965 この地区の南端となる石垣で高さは約1mである。この石垣を境にして南の区画は高くなっていたことが知られる。

S V 2966 屋敷の西境界となる石垣で高さは約1.5mである。この石垣の西、山裾にも平坦面がみられ、高い屋敷の存在が知られる。

S A 2989 道路S S 2950・2951に沿ってゆるやかに湾曲する掘立柱の柵列である。約5尺間隔で柱が配されている。

S B 2970 石垣S V 2965と溝S D 2955によって区画された**50-2**屋敷内の建物で、ほぼ屋敷間口一杯に建てられている。東西約6.5m、南北約3.6mの規模を持つ。南の礎石列は間隔が狭くばらつきがみられる。基本となる柱間寸法は明らかでない。

C地区

東西方向道路S S 2001の南の屋敷群である。中程の石垣S V 2962で大きく2分される。ここには井戸S E 2978・2979・2980・2981が検出されており、さらに2つに分けられ、町屋的な小区画であった可能性が高い。詳細については次回の調査に譲ることとする。

以上、概要を述べた。今回の調査の中でA地区の屋敷について、各時期の遺構を面的にとらえることが出来たことは有意義であったといえよう。また、道路も一部を断ち割って調査することが出来た。今後、これらの結果と、周辺地区の調査の成果を検討し、町割について、より詳細な検討を加えてゆきたいと考えている。

発掘された遺物

遺物整理の概要 第50次調査の出土遺物の整理は、基本的に第36次調査の方法を踏襲した。即ち、すべての遺物にナンバーを付して台帳に登録した後、①区画・道路単位に扱う、②各区画内の遺物は更に建物基準とした遺構面毎の遺物群＝グループに再編する、③溝、井戸、石組橋といった小さく完結する遺構については、個々の遺構毎のままとし、必要に応じてその遺構が属する遺構面への編入をする、④道路については、複数の道路面を、路面とその下位の整地土を1組としたグループに編成する。以上の方法によって、作業的に可能な範囲で有機的な意味をもつ遺物群に分割、統合しようと考えた。その各々には区画○、グループ○の表示を用いた。写真図版、実測図もグループ毎に作成し、最大限の遺物を取録するよう努めたが、小破片等、一部を割愛している。

作業の結果、道路が4、区画が9に分割され、これ以外に道路側溝と区画の境界の溝が8ある。これらについて、先の方法による遺物整理が進行中であるが、これまでに完了したのは、東西道路 S S 2001と、その側溝 S D 2860、S D 2863、区画50-1の分である。紙面の制約もあり、本稿では第50次調査の主体部の区画50-1について概要を報告する。なお、区画50-1は東部の $\frac{1}{2}$ が第49次発掘区に属しており、ここでは第50次分のみを扱っている。

記述にあたって、遺物の分類は、越前焼については、第36次調査報告「県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告」1983、土師質皿については、「朝倉館跡発掘調査報告」1975、中国製磁器の碗、皿については、「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」貿易陶磁研究No.2 小野1982を用いた。詳細はそれらによらたい。

区画50-1のグループ編成 区画50-1の明瞭な遺構面は、67列～69列に中心をもつ礎石建物 S B 2975を基準とする遺構面Ⅱと、その下位になる、70列～73列の礎石建物 S B 2976を基準とする遺構面Ⅲである。この上位に確認されるのが、井戸 S E 2984や、同レベルの散在する礎石に示される遺構面Ⅰである。また、遺構面Ⅲの下位にも N、O 列の70～73列の深掘り区内に遺構面Ⅳが検出されている。

以上の遺構面を基準として、グループを編成した。グループ1としたのは、70列以西の、西へ向かってレベルを上げていく盛土の遺物で、この盛土は西側土塁の石垣の



挿図-8 東西道路・区画50-1模式図

残存レベルより上位に堆積している。グループ2は、遺構面Ⅰに伴うものと、遺構面Ⅰを形成する茶褐色土を主とするものである。グループ3は、遺構面Ⅱとその直上の土座と思われる腐植部、及びこれらを被う青灰色の山土整地土の遺物である。69列より東は遺構面Ⅱ以下は発掘していない。グループ4は、遺構面Ⅲとこれを被う暗緑～褐色の山土整地土からの遺物である。遺構面Ⅲは、72列以西で次第にレベルを上げていたようで、この部分が軟質で黒灰～暗褐色の粘土となっている。グループ5は深掘り区内での遺構面Ⅲ以下の黒灰色～黒褐色粘土の遺物である。途中の遺構面Ⅳによって以下を分離する必要があるが、ここでは一括しておく。

区画50-1 グループ2 (PL. 8 第14図)

越前焼 大甕、播鉢の破片が多く、これに壺、火桶、鉢が少しある。壺は小破片では甕との区別がむづかしい。大甕は口縁の肥厚した大甕Ⅳ群c(3)が多く、Ⅲ群b(1)やⅣ群b(2)が混じる。大甕の肩につくスタンプは凹字の「本」と格子目の組合せで、A19(4)、A11(5)が確認される。(6)、(7)はナデ肩を特徴とする中甕。壺は(8～13)で肩のヘラ記号と口縁をのせた。図示しなかった中に小形のお歯黒壺が数点ある。播鉢は(15～17)のような口縁を内傾して切り、口縁下に明瞭な段をもつ播鉢Ⅳ群が主である。越前焼は全体に小破片が多く、まとまる個体はない。

瀬戸・美濃焼 破片数が少ない。鉄軸では天目茶碗(19～21)、皿(22・23)、坏、壺、茶入(26)など、灰軸では皿(28)、盤(29・30)などが認められる程度である。

中国製陶磁 青磁には碗、皿、香炉などがある。碗は無文の平茶碗(31)、線描き蓮弁文碗(34・35)、無文の(32)がある。皿には、菊皿(36)、稜花皿(38)、内湾する皿(37)などに混って、端反りの皿(39)がある。(40)は内面に片切りのヘラ文様をもつ小形の盤である。また、仕上りは灰白だが、軸が厚く、貫入の多い、磁胎も灰褐～黒褐の青磁が認められる。(41)は稜花形の碗又は鉢で、その他には花生かと推定される筒形のもの、口縁の内湾する皿などがある。白磁は坏と皿で(42)は木瓜形の小平、(43)は見込に露胎圈をもつ小平、皿には白磁皿B群とした高台に抉りをもつ(47)や、高台部のヘラ削りが厚く、露胎のままとする端反り皿(44、45)、白磁皿C群とした(48、49)、輪花形の(46)が認められる。(50)は梅瓶の蓋と推定され、胴部には梅瓶に多い渦文のヘラ切り、上面には型押し文様がある。軸はわずかに青味のある青灰色で、内面は露胎である。染付は碗皿のみ。碗には蓮子碗で芭蕉葉文をもつ染付碗C群Ⅰ(51)、饅頭心碗で雷文帯と唐草文をもつE群Ⅵ(52、53)、小片で図示しなかった口縁の外反するB群等がある。染付皿には、端反りの染付皿B1群が多く、B1群Ⅵ、Ⅶ(54、55)、Ⅷ(56～58)が認められる。葦筒底をもつ染付皿C群は少なく、内湾する皿E群と共に各1片ずつのみである。(59、60)は鉄軸の瓶又は壺で、後者は葉茶壺である。(61)は赤褐色の胎土に鮮やかな緑釉をかけた香炉で、三足は如意形である。

銅銭 図示したものは、OP68よりまとまって出土した60点の内の一部で、その内訳は以下の通りである。開元通宝5点、乾徳元宝1、淳化元宝2、祥符元宝1、天禧通宝2、天聖元宝2、明道元宝1、景祐元宝1、皇宋通宝6、嘉祐通宝1、治平元宝2、熙寧元宝4、元豊通宝9、元祐通宝5、紹聖元宝1、聖宋元宝2、聖宋通宝1、政和通宝2、淳熙元宝1、洪武通宝1、永樂通宝6、宣徳通宝1、不明3。もとは、グループ3の銅銭40点と一括の可能性がある。

区画50-1 グループ3 (P.L. 19, 20 第15, 16図)

越前焼 大甕と播鉢の破片が多く、壺・鉢は少ない。大甕は口縁の判明するものが少なく、その組成は出せないが、大甕Ⅲ群b(89, 90)が古く、Ⅳ群a(91)、Ⅳ群b(92)、Ⅳ群c(93)等、各群のものを認める。この中で(92)は下半部を除く約3/4個体程が破片としてOP67よりまとまって出土しており、肩にはA19のスタンプが認められる。播鉢は口縁の断面が丸く、内側の沈線が下がっているⅢ群aや、Ⅲ群bの中でも見込に播目がつき、口縁の上面が次第に平らになる新しいもの(97~99)や、さらにそれが内傾して切られ、播目も間隔がないⅣ群(100, 101)など各群がみられる。(102, 103)の鉢も口縁断面からみると、Ⅲ群の新しいものや、Ⅳ群に各々対応しそうである。

瀬戸・美濃焼 破片数が少なく、鉄釉では、天目茶碗(104~106)、皿(108)、香炉かと思われる(109)、小振りの片口(110)があり、灰釉では、皿(111, 112)、瓶子(113)、鉢(114)がある。(111, 112)は山梨県新巻本村例のような削り出し高台をもつ、腰折れ外反するものである。なお(111)の高台内には墨書銘が認められるが、判読されない。(113)の瓶子は、グループ4の(213)と同一個体で、下位からの混入と思われる。

中国製陶磁 青磁は碗が多く、(116~121)の線描き蓮弁文、(122, 123)の無文のものなどがみられる。この中、(119)の見込は「吉」、(120)は「福」のスタンプをもつ。また、(120)の割れ口には漆による接合の痕を残す。白磁には高台に挿入のある白磁ⅢB群や、これと共存する坏(124)が少しあり、白磁ⅢC群とした端反り皿(125, 126)が多い。染付には、見込に「寿」をもち、厚く、高い高台の染付碗B群Ⅳ(127)や、梵字文をもつ蓮子碗の染付碗C群Ⅱ(128)があり、皿には、端反りの染付ⅢB1群Ⅴ(129~131)、B1群Ⅵ(132)が多く、碁笥底の染付ⅢC群Ⅲ(133)を除けば、染付ⅢC群、B2群、E群等がないことが注意される。(134, 135)は二次的に火を受けた鉄釉の瓶か壺で、グループ2の(59)と同じ個体であり、(136)は葉茶壺である。

朝鮮製陶磁 (137)は小振りの平茶碗又は皿で、細砂を多く含む赤褐色の胎土に灰分の多い釉がかかる。

金属製品 銅銭の中、(138~175)はOP69からの一括40点の一部であり、他は個別に出土している。(184)は平打ちのかんざしの頭部で表裏に桐葉の文様をもつ。

区画50-1 グループ4 (P.L. 20~22 第17, 18図)

越前焼 播鉢が多く、大甕が少ない。大甕の口縁には大甕Ⅳ群a (186~188)とⅣ群c (189)が認められる。また壺にも大甕Ⅲ群とセットかと思われる(191)など古い時期の例が混じる。播鉢では、播鉢Ⅲ群が主体で、口縁断面が厚く、丸いⅢ群a (194)や、少し薄く角ばったⅢ群b (195~198)がある。これらはまだ見込に播目がなく、片口をもつのが特徴である。(200、201)は口縁の上面が平らに調整され、内側の凹線や段が口縁近くにあり、Ⅳ群に近くなる。(202、203)はⅣ群で、この2片のみである。

瀬戸・美濃焼 破片数が17点と大甕少ない。鉄釉では天目茶碗(204~208)、鉢(209)、茶入かと思われる壺(210)があり、灰釉では無文の碗(211)、面取りした背面に釘穴をもつ懸花生(212)、瓶子(213)、端反り皿の小片がある。(214)は小鉢で、外面全体に厚く黒漆を塗って仕上げている。

中国製陶磁 青磁の碗が多い。中でも線描き蓮弁文(218)や無文(219)が多いが、口縁に雷文帯をもつ(215)、丸く細い蓮弁をへらで削り出した(216)、間隔の広い線描き蓮弁(217)なども混じる。高台は低く大きいもので、腰も丸く張る。高台は畳付まで施釉される。皿には腰折れ外反する稜花皿(225、226)と、内外面にへら文をもつ内湾する皿(227)とがある。

(228)は盤で、椀や鍋部は丸く鋭さが無い。白磁には碗、皿、坏がある。(229)は口縁外反する大振りの碗で、厚く削った低い高台をもつ。広い見込にはスタンプがつく。(230)も法量的には同じくらいの碗で、高台は少し高く、内が丸く、厚く削られている。皿は白磁Ⅲ群が主体で、高台に抉りのある(235~238)と抉りのない(233、234)がある。坏もこれと共伴する(231)や面取りした(232)が認められる。白磁Ⅲ群C群(239、240)も少ないがある。染付では、見込に「ネジ花」をもつ高台の高い碗(241)や、染付碗B群と推定される(243)、染付碗C群(蓮子碗)の(242)がある。皿は、端反りの染付皿B1群が多く、この中のⅣ(244~246)、Ⅴ(247)がみられる。(248)は蕃筭底をもつ染付皿C群である。(249)は赤褐色の胎土に、灰褐釉をかけた、タタキ成形の瓶の口縁である。

朝鮮製陶器 (250)は灰緑色の地に、薄く白土を刷毛で引いた碗である。

石製品 硯(251)は作りが粗く、再加工品である。特に海部には削った際の刃の跡が顕著に残される。また、左外縁は他の面に比べて粗い調整で切り直していると推定される。底面にはたくさんの線刻があるが、内容は不明である。法量は、11.4cm×7.0cm×2.3cm。断面が上に開いた台形をなすのが特徴である。石製品としては、他に笏谷石製の火鉢(バンドコ)、砥石の破片がある。

金属製品 銅製の菊皿(252)は、お歯黒用のもので、17弁よりなり、花尖は格子目を持ち、裏の高台状の部分とを鋏でとめている。部分的に鍍金が残る。銅銭は、11点ほど出土しており、保存の良い例を図示した。

接合資料の検討

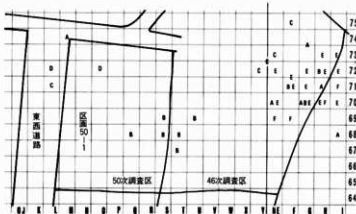
接合例の分布をみると、播鉢(97)のようにひとつのグループ内にまとまり、水平的にも近いグリッドに集中するもの、播鉢②のように、ひとつの区画内で、いくつかのグループに分布し、垂直的、水平的に移動しているもの、また、青磁盤⑤や染付碗(128)のように区画を越えて接合したものなどが認められる。区画を越えた接合例には、特徴ある個体のため46次の遺物との接合が判明したのもあり、この中には約40m以上も移動した例が知られる。この中で青磁盤Aは道路側溝のかなり深い埋土からの出土である。

本稿では、遺物の水平的なまとまりとして、区画を単位とする遺物群を報告してきたが、以上のような接合例のあり方をみると、これを短絡的に意味づけするのは危険であると思われる。従って、ここではこれを出土時における物理的なまとまりと理解されたい。これは36次J地区での接合資料の分析結果と同様であり、その際にも述べたように、その区画出土の遺物群を、その区画で使用されたものと判断するには、より積極的な理由が必要であると考えられた。

区画を越えた接合例 ▶

- A:青磁壺 D:越前甕
B:鉄軸頭 E:青磁花生
C:タイ(?)壺 F:白磁壺

区画50-1 接合例 ▼



器種 (図説No.)	播鉢 ①	播鉢 (97)	播鉢 ②	播鉢 (197)	播鉢 (196)	播鉢 (198)	灰種皿 (112)	灰種椀 (213)	青磁碗 ③	青磁碗 ④	青磁盤 ⑤	染付碗 (128)	越前甕 D
区画50-1	グループ 1	OM74in									OM70		
	グループ 2	OP67 OR72		OR67	OO73			OO67			ON67		
	グループ 3	OP67 OS69	OQ68 OP69 OQ68	OO73 ON72 ON73				ON67	ON73 OQ73	ON73			OS69
	グループ 4			OO73	OP73	OP72	OP73 ON73		OP72	OS71	ON73		
	グループ 5						OO72	ON72			OO73		OO72
溝 (S D2873)			OM68										
東西道路(S S2001)	グループ 1												OK71
	グループ 2										OL70		
	グループ 3												
	グループ 4												OL72

区画50-1・東西道路 (SS2001) 遺物一覧表

器種	区画	区画 50 - 1							東西道路 (SS2001)					合計			
		Pl-71	2	3	4	5	計	%	Pl-71	2	3	4	計	%		%	
日本製 陶磁器	越前 鉢	嬰	224	490	298	143	80	1,235		749	235	220	103	1,307			
		鉢・器 他	25	79	60	17	3	184		123	59	32	10	224			
	焼	他	49	90	73	91	22	325		184	76	102	43	405			
		計		3				3									
	土師 質	皿	29	174	412	371	138	1,124		107	121	289	336	853			
		土釜 他		7	6	1	1	15		1	1	8	1	11			
	美濃・ 瀬戸 焼	他		1			1	2				1	3	4			
		計	29	181	419	372	140	1,141	32.0	108	122	298	340	868	24.1	2,009	28.0
	美濃・ 瀬戸 焼	鉢	2	6	16	9	12	45		9	9	9	3	30			
		皿 他		3	2			5		4	6	1	1	12			
美濃・ 瀬戸 焼	他	7	7	2	2		18		15	5	9	3	32				
	計	9	16	20	11	12	68	1.9	28	20	19	7	74	2.1	142	2.0	
美濃・ 瀬戸 焼	鉢		3	1	1		5		1		1	1	3				
	皿 他	4	4	4		1	13		11	8	9	4	32				
美濃・ 瀬戸 焼	他	2	5	10	4	1	22		3	6	1	3	13				
	計	6	12	15	5	2	40	1.1	15	14	11	8	48	1.3	88	1.2	
美濃・ 瀬戸 焼	美濃他				1		1	0.03							1	0.01	
	計	15	28	35	17	14	109	3.1	43	34	30	15	122	3.4	231	3.2	
美濃・ 瀬戸 焼	瓦質陶器	2	3	2	1	5	13	0.4		1			1	0.03	14	0.2	
	備前・他	3	9	2			14	0.4	11	4			15	0.4	29	0.4	
美濃・ 瀬戸 焼	小計	347	883	889	641	264	3,024	84.8	1,218	531	682	511	2,942	81.8	5,966	83.3	
	青	8	13	24	30	10	85		21	6	8	14	49				
中国製 陶磁器	鉢	7	5	1	5	10	28		24	6	10	1	41				
	皿 他	5	7	1	2		15		18	11	5	1	35				
中国製 陶磁器	計	20	25	26	37	20	128	3.6	63	23	23	16	125	3.5	253	3.5	
	白								1		1		2				
中国製 陶磁器	鉢	25	49	12	15	4	105		136	62	33	11	242				
	皿 他	5	3	2	2	2	14		10	4		1	15				
中国製 陶磁器	計	30	52	14	17	6	119	3.3	147	66	34	12	259	7.2	378	5.3	
	染	9	10	8	4		31		18	6	9		33				
中国製 陶磁器	鉢	15	19	8	6	4	52		60	34	15	7	116				
	皿 他		1				1		4	1	2		7				
中国製 陶磁器	計	24	30	16	10	4	84	2.4	82	41	26	7	156	4.3	240	3.3	
	他	9	4	7			20	0.6	3	1		4	0.1	24	0.3		
中国製 陶磁器	小計	83	111	63	64	30	351	9.8	295	130	84	35	544	15.1	895	12.5	
	朝鮮製陶磁器	4	1	2	1	8	0.2		6	1			7	0.2	15	0.2	
中国製 陶磁器	タイ製(?)陶磁器									1			1	0.03	1	0.01	
	金								1	1	2	2	6		128		
金属	釘	61	49	11	1	122			1	2	1	1	5		9		
	他		4				4		1	2	1	1	5		9		
金属	計	3	4	1	1	9			1	1		2	4		13		
	計	64	57	12	2	135	3.8	3	4	3	5	15	0.4	150	2.1		
石	バンドコ	6	4	2			12		19	9	3		31		43		
	鉢・盤	4	7	1			12		10	5			15		27		
石	紙石	1	2	3			6		4	2		1	7		13		
	硯		3	1			4		1	1	1		3		7		
石	他	5	6	1	2	2	16		26	5	2		33		49		
	計	16	22	8	2	2	50	1.4	60	22	6	1	89	2.5	139	1.9	
合計	合計	446	1,084	1,018	721	299	3,568	100.0	1,582	689	775	532	3,998	100.0	7,166	100.0	

※本製品は除外してある。

第44次発掘遺構整備工

(P.L. 1・23・24 第19・20図)

この工事は、昭和57年度に第44次発掘調査として実施した、福井市城戸ノ内町字赤淵地係約2,850㎡を対象として保存整備するものである。

この付近一帯は、これまでの第17・36・40・42・46次の各調査を通じて明らかにされたように、南北方向の幅約8mの道路を中心にこれに交わる東西方向道路によって大きく区画され、これらの道路に面する敷地間口約6～10m程の町屋と考えられる小屋敷群と、西山裾に位置する寺院と考えられる大屋敷群によって構成されている。今回の整備対象地区はこの北部に位置している。整備地は北端に南北方向道路と直交する東西方向道路と、南寄の西山裾の屋敷へ向う道路がみられ、その骨組を構成している。南北方向道路にはその両側に町屋群が連続するが、東側の大半は新設泉道の下となった。この町屋群の中にはほぼ敷地一杯に建物が建てられ、井戸・便所を備えている。また、中には越前焼の大甕を10数個埋設したのもも検出されている。この町屋群と山裾の屋敷との間は比較的大きな区画となり大規模な礎石建物が検出されている。

今回の整備工事は、前述したような、この地区の性格をわかりやすく表示し、合せて遺構の保存を計ることに重点をおいた。そのため、町割を明確に示すこととし、崩壊したり大きく孕んだ石垣・溝等を補修し、当時の整然とした町並を再現するようにつとめた。整備方法としては、道路を砂利敷とし、町屋群を礎混りソイルセメント舗装とし、内部の建物の内、規模等明確なものはレミファルト舗装とした。この町屋群の奥の屋敷は張芝とし、建物を珪石砕石で表示した。また、見学者に緑地や木蔭を提供するため、アカマツ、ケヤキ、ヤマザクラ等の高木を植栽した。また合せて、井戸枠を復原設置し、遺構名称を刻した表示石を要所に設置した。

なお参考までに、工事仕様の概要を以下に示す。

工 事 仕 様 概 要

盛土・整地工 発掘調査によって生じた凹凸の多い遺構面を、良質の発掘排土を用いて埋戻し、盛土を行い、遺構の保護を計り、また、整備施工上支障のないような基礎面を作る。このため、埋戻し・盛土面は特に入念に転圧した。

溝・石垣等補修工 検出された石積の溝・石垣・井戸・便所等で、上部が崩壊したり、大きく孕み崩壊の危険のある所を、発掘調査に際し撤去した転石等を用いて周囲の石積方法等に習い補修した。

ソイルセメント舗装工 良質の山砂0.15㎡当り、セメント20kgの割合で少量の水を加え、ミキサーを用いてよく混合の上、厚5cm程に敷均した。なお、水の量は、山砂とセメントの混合

を助ける程度とし、セメントの分離のないように注意した。

礫混ソイルセメント舗装工 良質の山砂0.15㎡当り、セメント40kgに水を加え、ミキサーを用いてよく混合し、砂利0.15㎡を敷均しの過程で配合し、砂利が均等にかつ表面近くに位置することにより、風雨により徐々に表面に現われるように配慮した。敷厚は7cmとした。

レミファルト舗装工 アスファルトブロック(240×25×120)を境界として用い、礎石天端より2～3cm低くモルタルを用い固定した。砕石により厚5cmの基礎盤を作り、この上にレミファルトを転圧舗装した。レミファルトの仕上り厚は5cmとし、転圧はランマ及人力を用いて入念に仕上げた。

珪石敷工 整備仕上面とは異なる下層の建物の表示に用いるため、その建物の規模をアスファルトブロック(240×25×120)で示し、内部にソイルセメントを厚5cmに打設し、これを基礎盤とし、この上に珪石の砕石を5cm厚に敷均した。

芝張り工 高麗芝片を目地幅3cm程で張りつけ、良質の山砂を厚薄のないようにまき、目地を埋め、灌水した。また、斜面に施工する際は竹串で芝片を固定した。

高木植栽工 樹木は充分吟味した優良なものを用い、遺構保存上から、鉢の高さ程に盛土の上植栽した。植栽した樹種は、アカマツ、ケヤキ、シダレヤナギ、ヤマザクラ、ヤマモミジ、アラカシ、ハクモクレンである。なお、支柱は二脚鳥居とした。

井戸枠復原設置工 出土した井戸枠片をもとに復原設計し、当時と同じ凝灰岩(笏谷石)を用いて大小2種を作製し、これを検出した井戸に設置した。

越前焼大甕復原設置工 検出した越前焼大甕の埋設遺構に下半のみを、輪積技法により復原製作し、設置した。

遺構表示石製作設置工 遺構をよりわかりやすくするため、その名称「道路」・「土塁」・「門」・「便所」等を花崗岩に刻し、設置した。

公園センター南整備工

(第21図)

この工事の対象としたのは、福井市城戸ノ内町字赤淵地係約560㎡である。

ここは、遺跡見学者のための便益施設として建設された公園センターの南隣に位置し、新設県道と一乗谷川にはさまれている。そこで公園センター周辺の環境の整備を計り、また、センター利用者の仮駐車スペースとしても利用可能な場を確保することを目的とした。全体を礫混ソイルセメント舗装とし、一乗谷川沿に高木を植栽した。

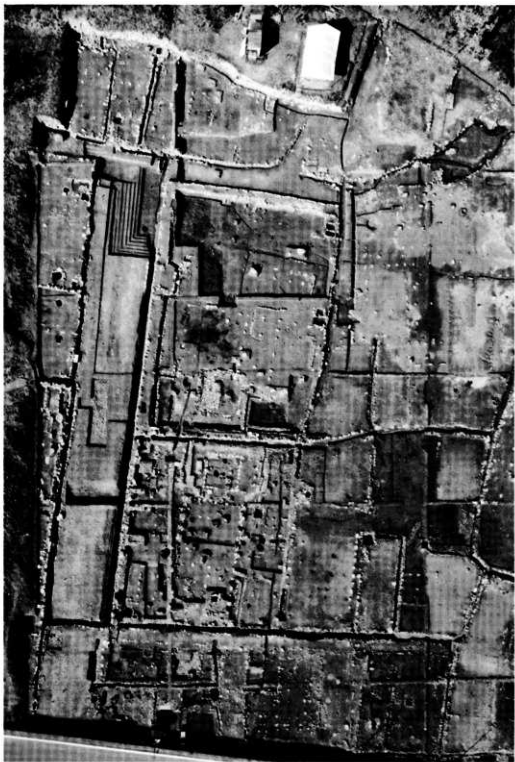
PL. 1



第49・50次調査区全景 (東北から)



第44次発掘遺構整備工全景 (北東から)



第49・50次調査区全景 (空中写真)



調査区全景 (東南から)



調査区全景 (東から)



A 地区全景 (北から)



C 地区全景 (南から)



建物 S B 2890 (北から)



建物 S B 2894 (北から)



建物 S B 2896 を覆う層 (西から)



建物 S B 2896 (西から)



門SI 2911 (北から)

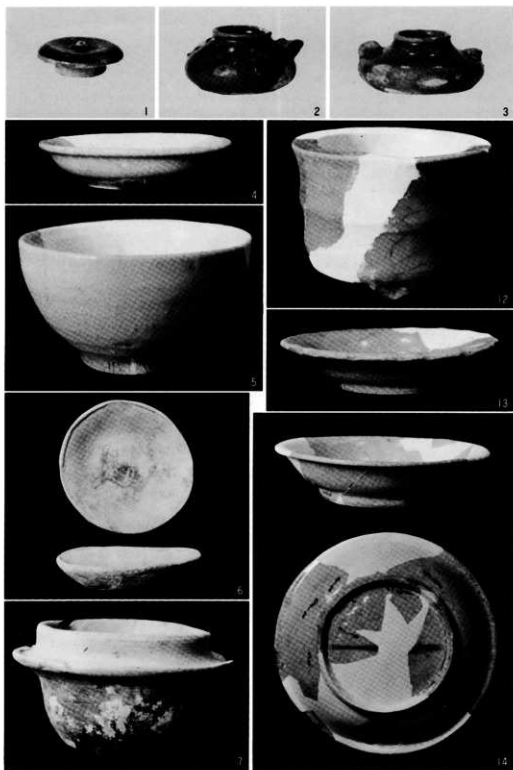


井戸 SE 2897
石積施設 SF 2906



井戸 SE 2898
地鎮具(?)出土状況

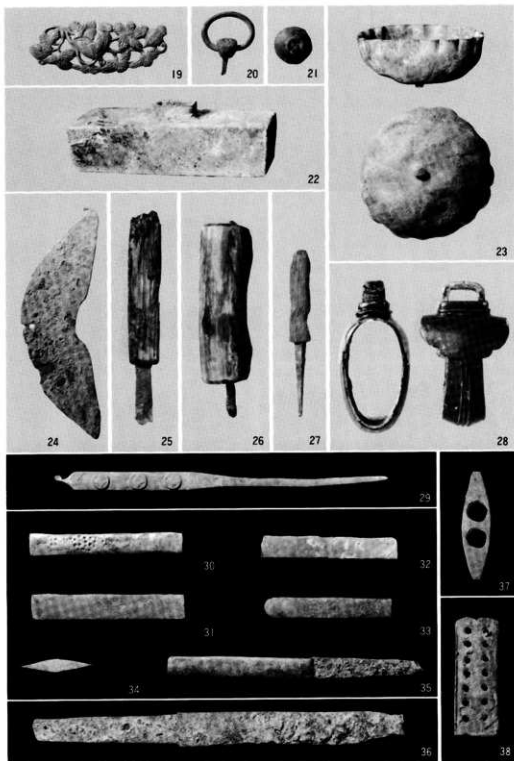




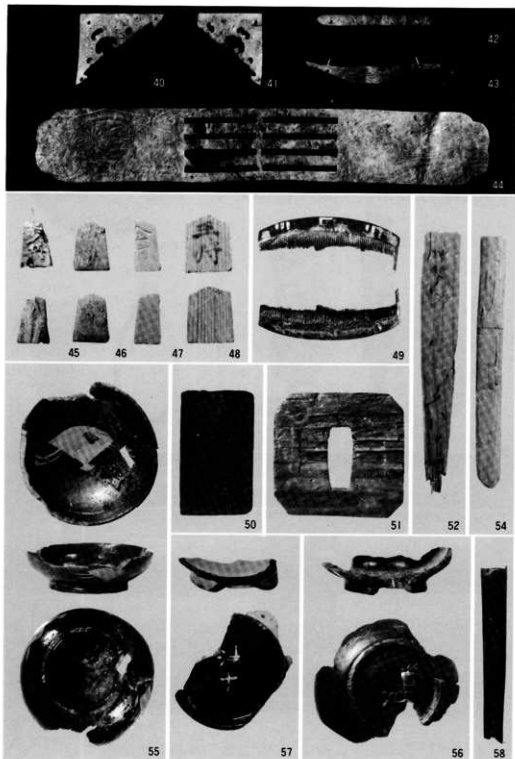
1. 茶入蓋 2・3. 水滴 4・13・14. 皿 5. 碗 6. 黒書土器 7. 土釜 12. 香炉



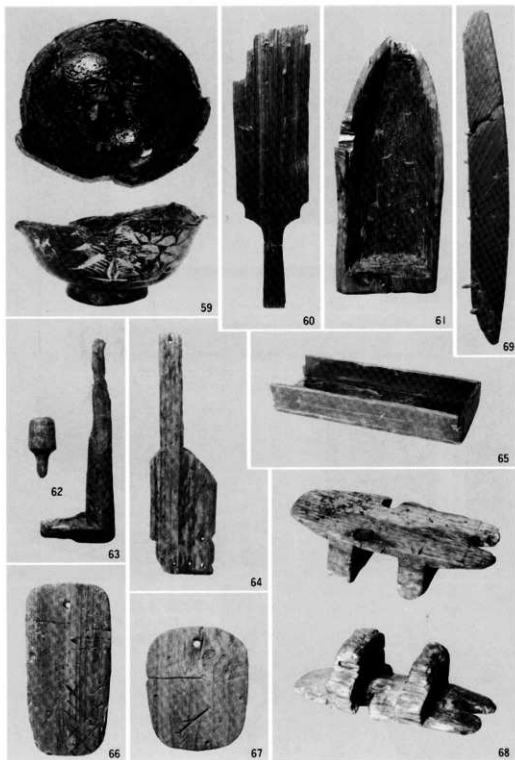
8. 土師貫皿(孔) 9. 一輪埴 10. 壺 11. 鉢 15・16. 碗 17. 梅瓶



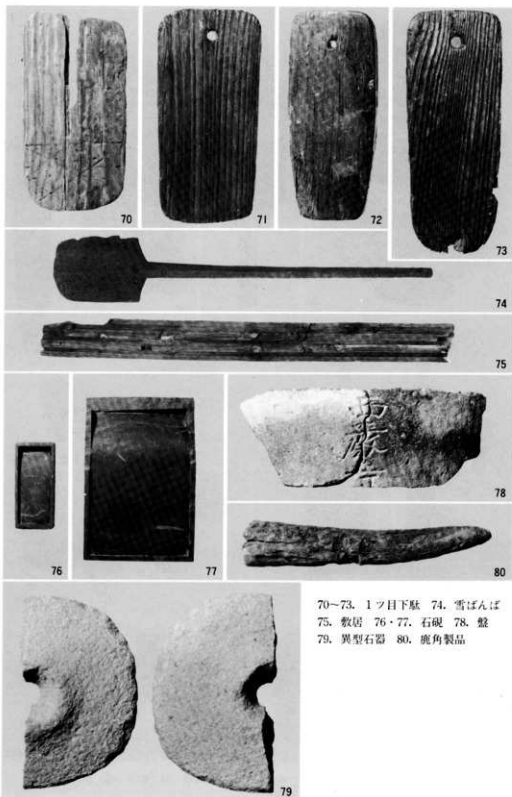
19. 飾り金具 20. 鑲付金具 21. 鈴 22. 水滴 23. 紅皿 24. 火打金 25. 鑿 26. 把手
 27. 錐 28. 足金物 29. 筭 30~33. 小柄 34. 目貫 35. 刀 36. 刀 37. 鞆 38. 小札



40~44. 飾り金具 45~48. 将棋駒 49. 蒔絵飾 50. 黒書木製品 51. 鈎 52. 木札 54. 鞘
55・56. 黒漆皿 57. 朱漆皿 58. 黒漆家具材



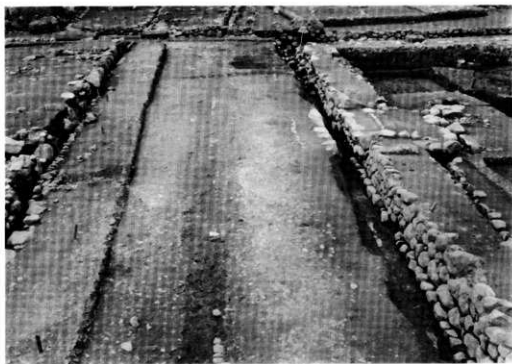
59. 黒漆碗 60. 羽子板状木製品 61. 舟 62. 栓 63. 茶臼柄 64. 刷毛 65. 黒漆箱
66・67. 1ツ目下駄 68. 連歯下駄 69. 鍋蓋把手



70～73. 1ツ目下駄 74. 雪ばんぼ
 75. 数居 76・77. 石硯 78. 盤
 79. 異型石器 80. 鹿角製品



調査区全景 (南から)



道路 S S 2001 (東から)



道路 S S 2950・2951・2952 (北から)



A 地区全景 (南から)



建物 S B 2975・2896 (南から)



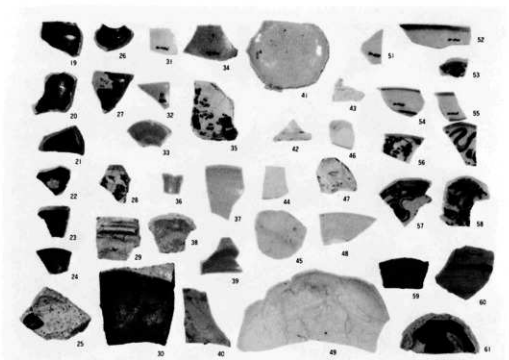
建物 S B 2976 (北から)



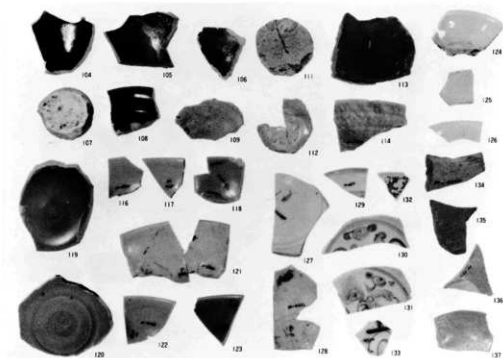
門S 12988 (南から)



B地区小屋敷 (東から)



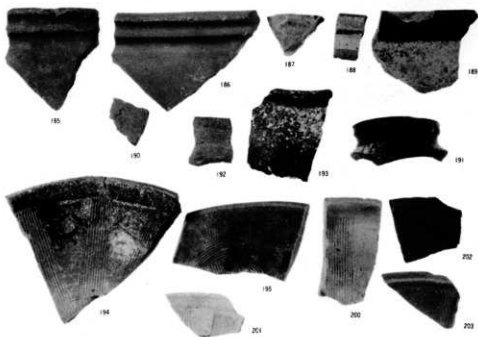
区画50-1 グループ2 瀬戸・美濃焼 19~21. 天目茶碗 22・23. 鉄釉皿 24. 鉄釉杯
 25・27. 鉄釉壺 26. 鉄釉茶入 28. 灰釉皿 29・30. 灰釉盤 中国製陶磁 31~35. 青磁碗
 36~39. 青磁皿 40. 青磁盤 41. 青磁梅花鉢 42・43. 白磁杯 44~49. 白磁皿 51~53. 染付碗
 54~58. 染付皿 59・60. 鉄釉壺 61. 緑釉香炉



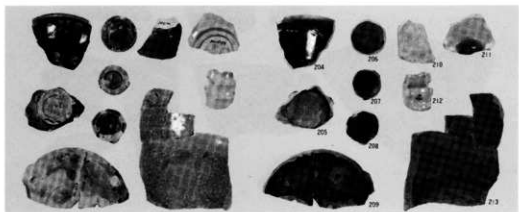
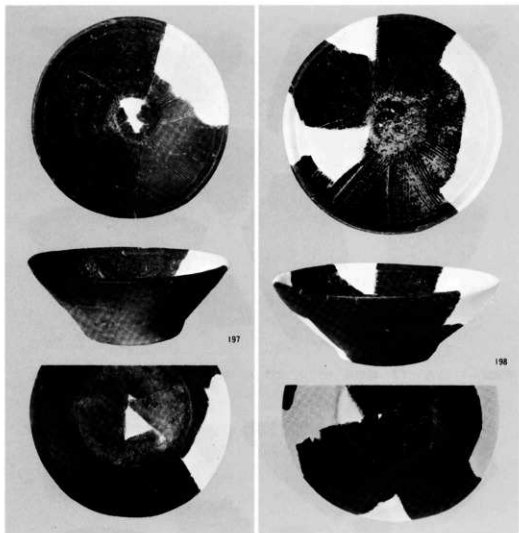
区画50-1 グループ3 瀬戸・美濃焼 104~107,天目茶碗 108,鉄釉皿 109,鉄釉香炉か
 111・112,灰釉皿 113,灰釉瓶子 114,灰釉鉢 中国製陶磁 116~123,青磁碗 124,白磁坏
 125・126,白磁皿 127・128,染付碗 129~133,染付皿 134~136,鉄釉壺 朝鮮製陶器 137,碗



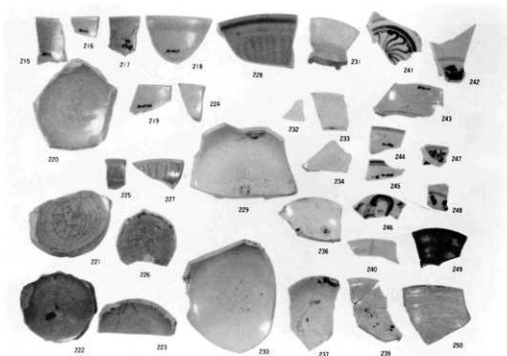
区画50-1 グループ3 越前焼 89~93, 大甕 94~96, 壺 99~101, 播鉢 102・103, 鉢



区画50-1 グループ4 越前焼 185~190, 大甕 191~193, 壺 194~203, 播鉢



区画50-1 グループ4 越前焼 197・198, 播鉢 瀬戸・美濃焼 204~208, 天目茶碗
209, 鉄釉鉢 210, 鉄釉小壺(茶入か) 211, 灰釉碗 212, 灰釉懸花生 213, 灰釉板子



区画50-1 グループ4 中国製陶磁 215~223. 青磁碗 224. 青磁環 225~227. 青磁皿 228. 青磁盤 229・230. 白磁碗 231・232. 白磁環 233~239. 白磁皿 241~243. 染付碗 244~248. 染付皿 249. 瓶 朝鮮製陶器 250. 刷毛目茶碗



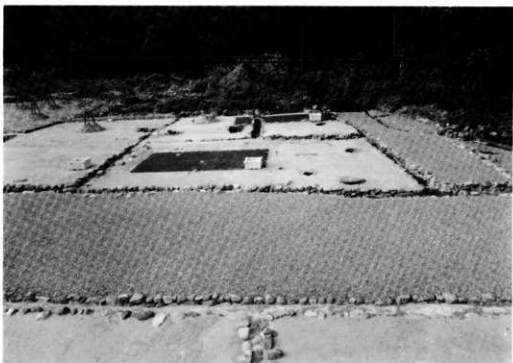
全 景 (南から)



町 屋 群 (北から)



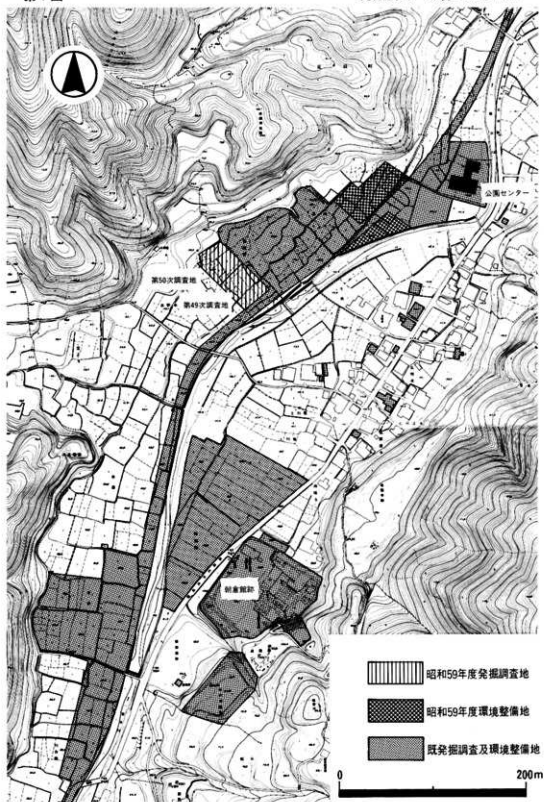
南半部 (東から)

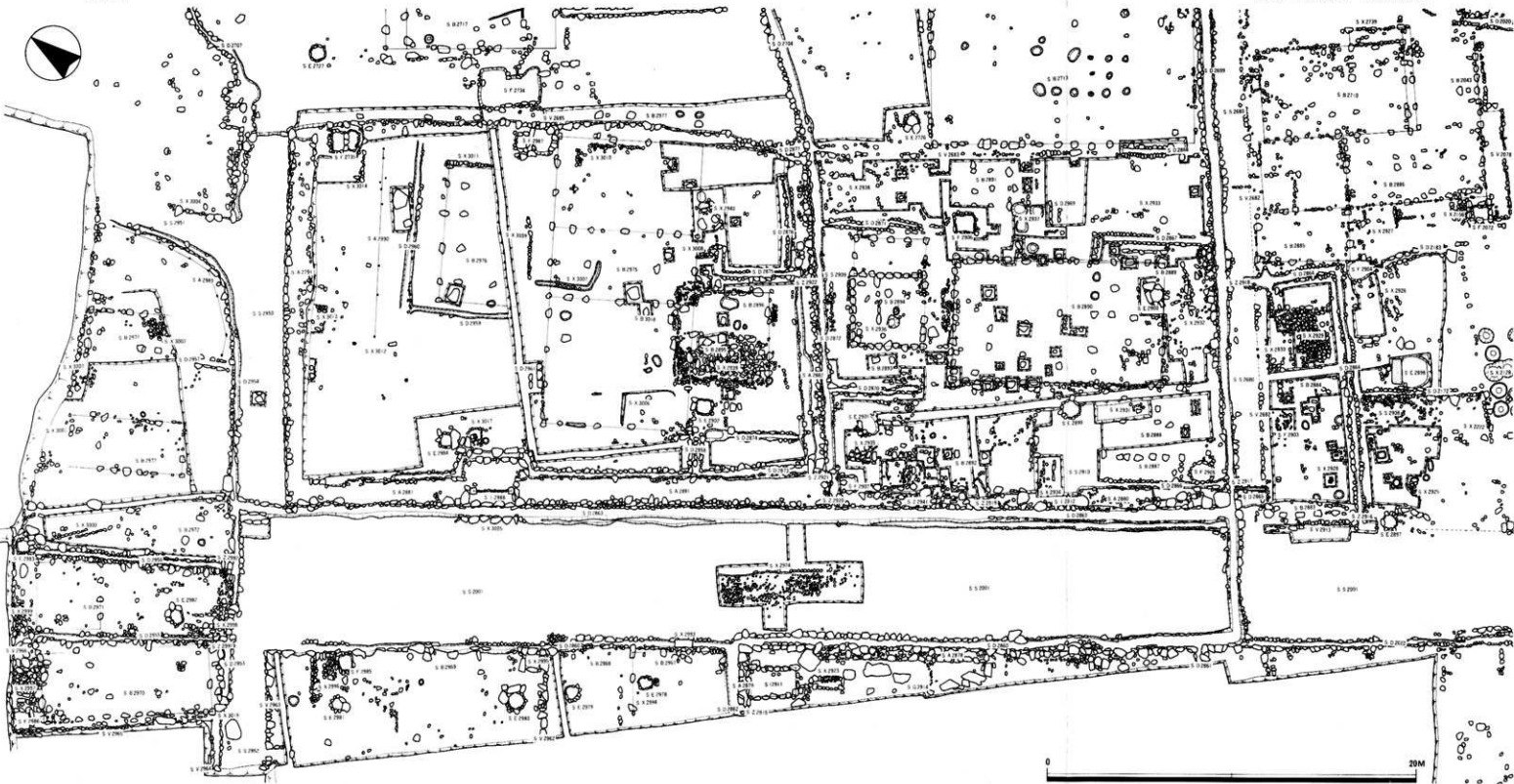


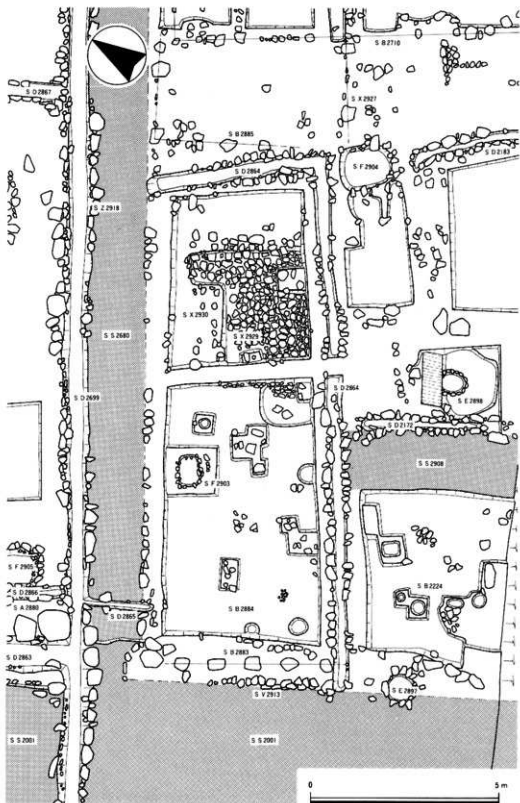
北半部 (東から)

第1図

発掘調査・環境整備位置図

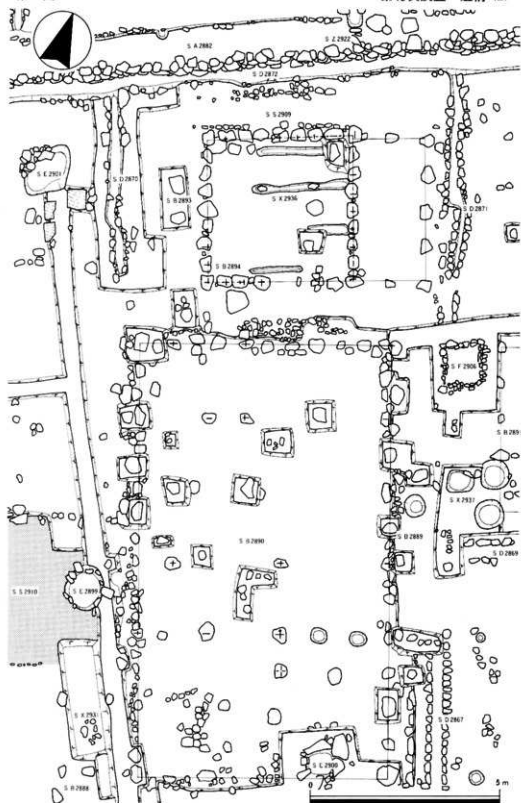




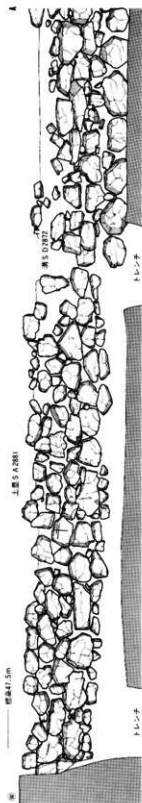


第4図

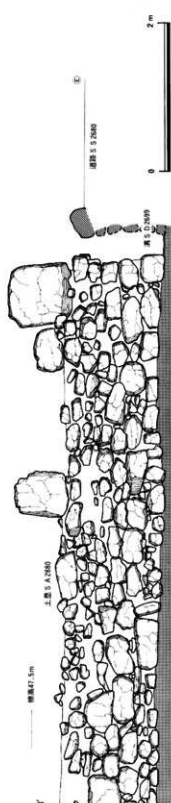
第49次調査・遺構(2)



第5図

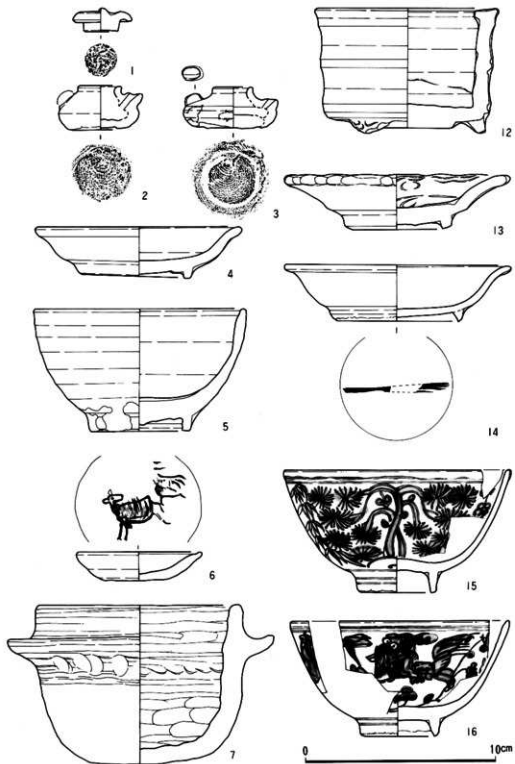


第49次調査・遺構(3)

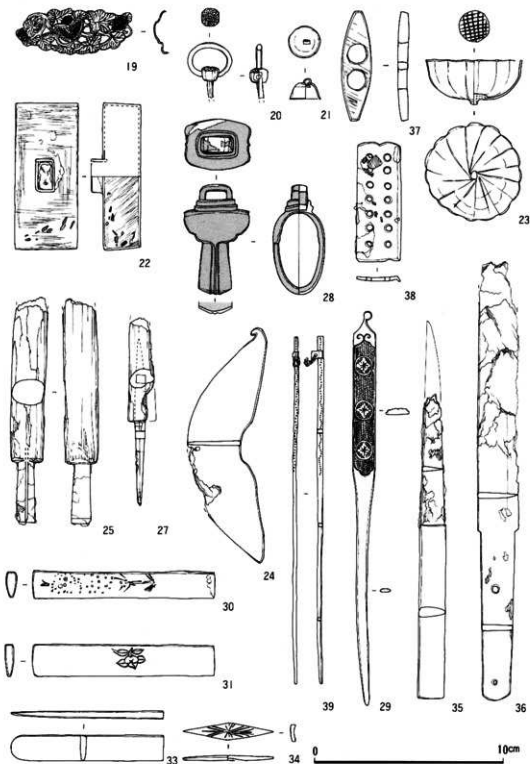


第6図

第49次調査・遺物(1)



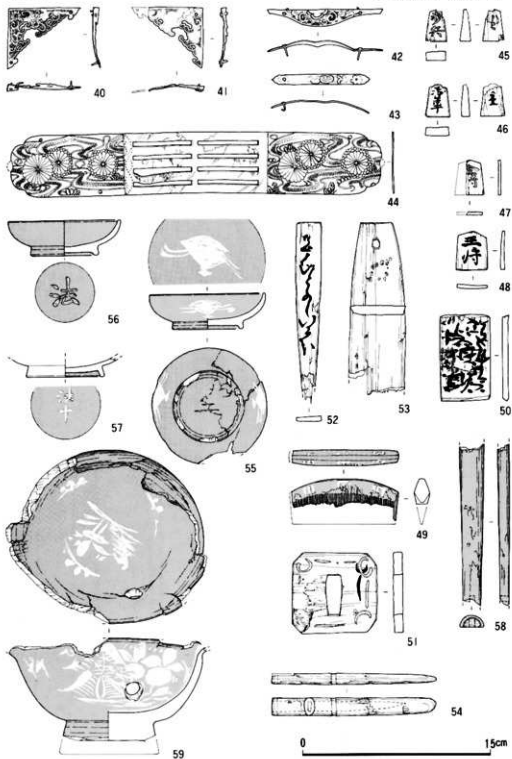
1. 茶入蓋 2・3. 水滴 12. 香炉 4・13・14. 皿 5・15・16. 碗 6. 墨書土器 7. 土釜



19. 飾り金具 20. 鍔付金具 21. 鈴 37. 鞍 38. 小札 23. 紅皿 22. 水滴 28. 足金物
25. 釵 27. 鎌 24. 火打金 39. 火箸 29. 笄 30・31・33・35. 小柄 36. 刀 34. 目貫

第8図

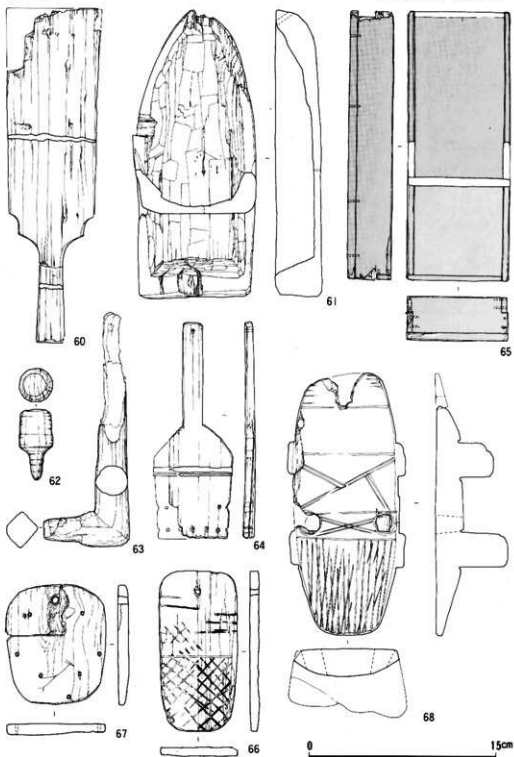
第49次調査・遺物(3)



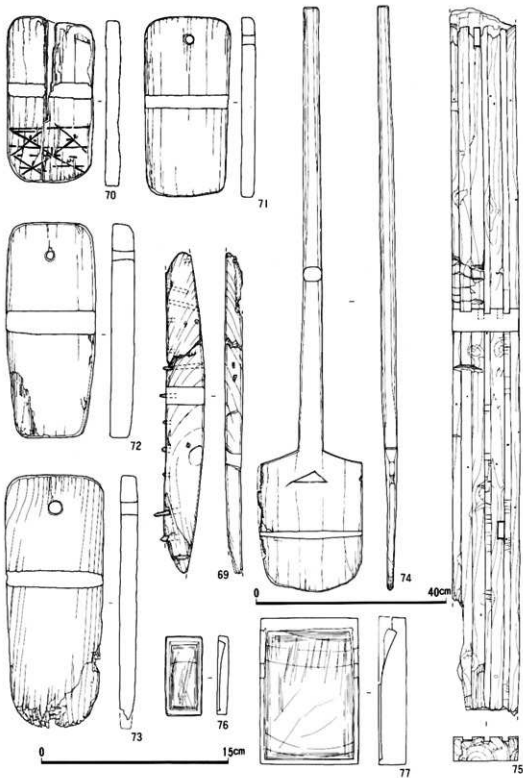
40~44. 飾り金具 45~48. 将棋駒 52. 木札 53. 木札状木製品 50. 墨書木製品 55・56. 黒漆皿
57. 朱漆皿 59. 黒漆碗 49. 蒔絵箱 58. 黒漆家具材 51. 鈎 54. 鞘

第9図

第49次調査・遺物(4)



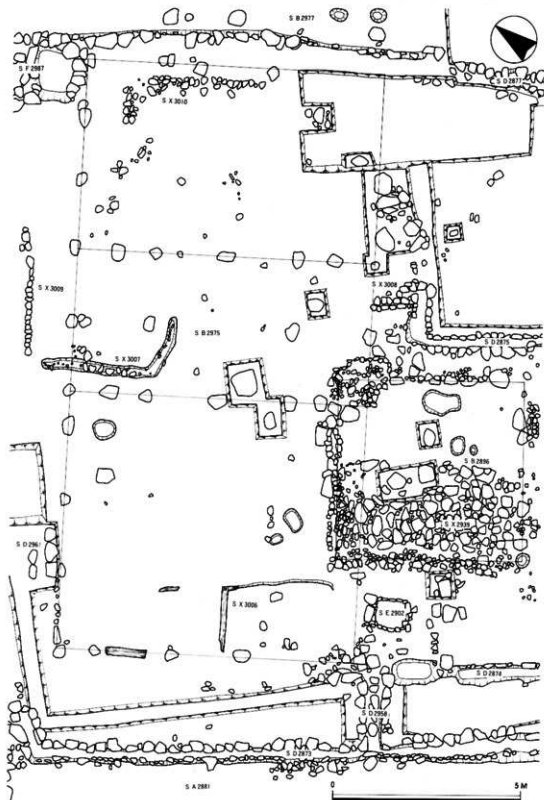
60. 羽子板状木製品 61. 舟 65. 黒漆箱 62. 栓 63. 茶白柄 64. 刷毛 68. 連歯下駄
66・67. 1 ッ目下駄



70~73. 1 ッ目下駄 69. 鍋蓋把手 74. 雪ばんば 75. 敷居 76・77. 石硯

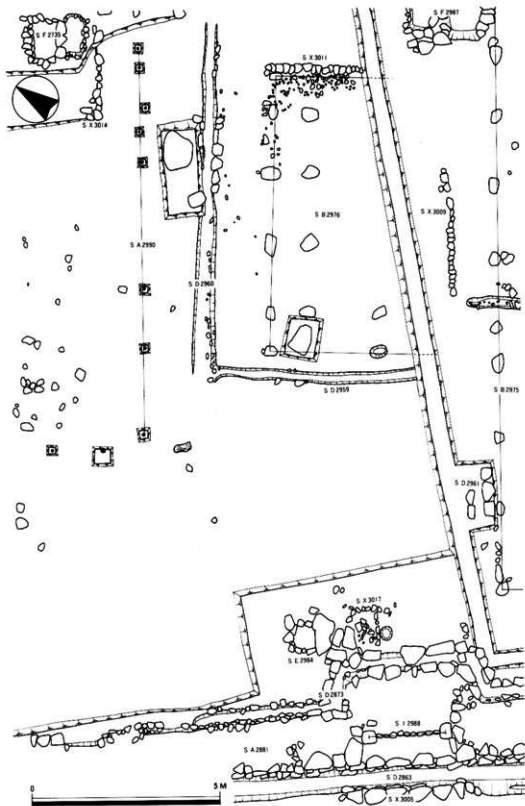
第11圖

第50次調査・遺構(1)



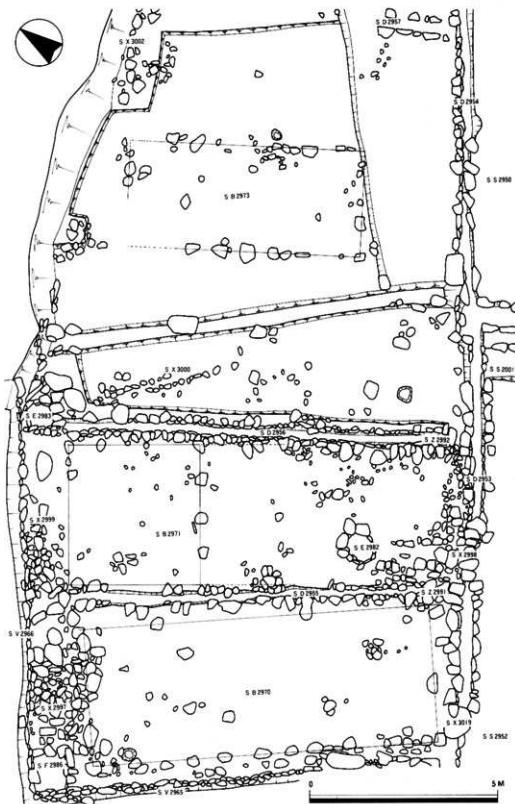
第12図

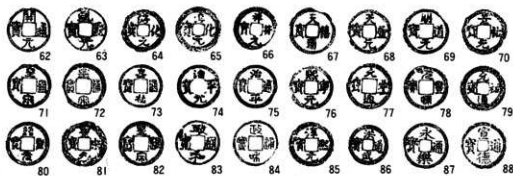
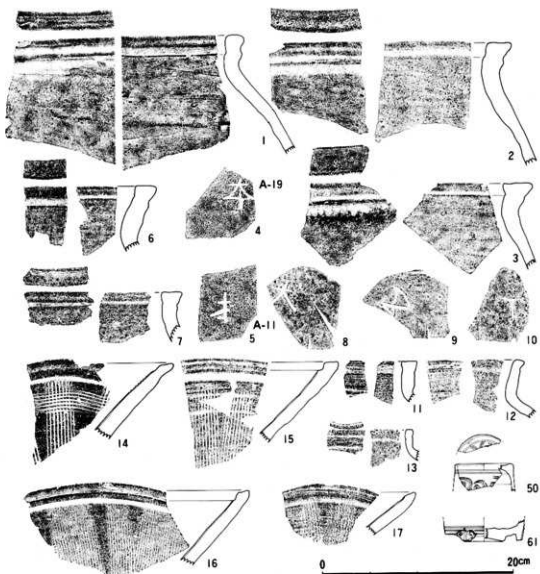
第50次調査・遺構(2)



第13図

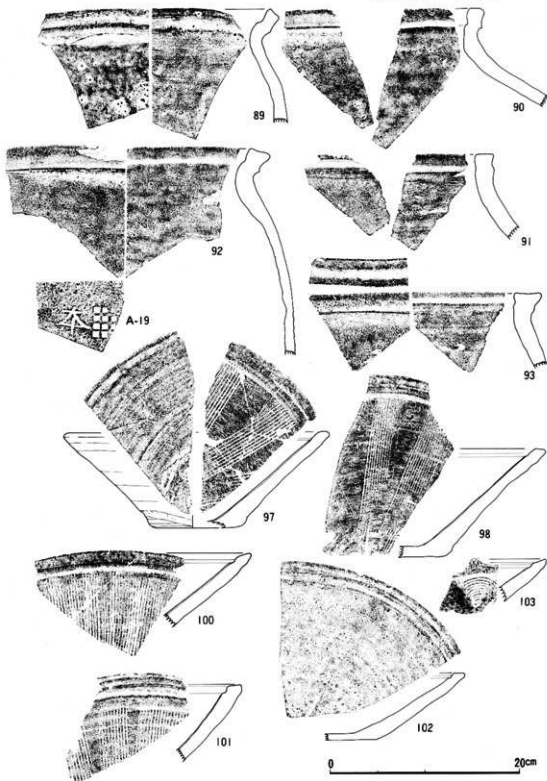
第50次調査・遺構 (3)



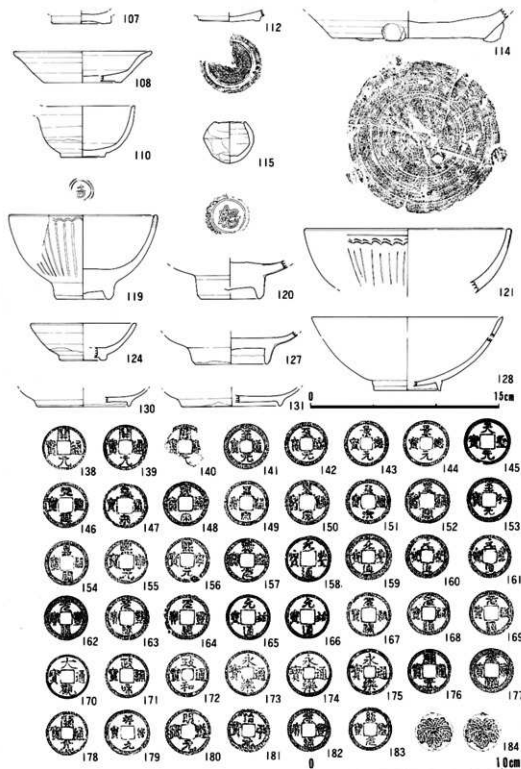


区画50-1 グループ2 越前焼 1~7. 甕
 8~13. 壺 14~17. 播鉢 中国製陶磁 50. 白磁蓋
 61. 緑釉香炉 銅銭 62~88

0 10cm



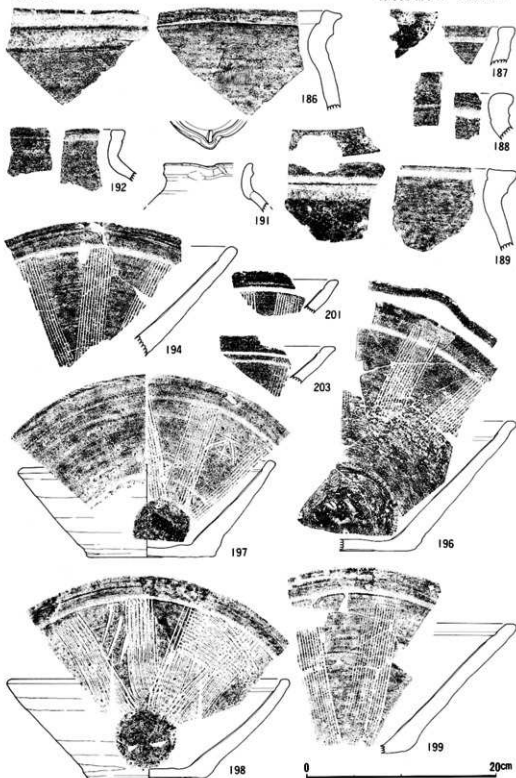
区画50-1 グループ3 越前焼 89~93. 甕 97~101. 摺鉢 102・103. 鉢



区画50-1 グループ3 美濃焼 107. 天目茶碗 108. 鉄袖皿 110. 鉄袖片口 112. 灰袖皿 114. 灰袖鉢 土師質土器 115. 小壺 中国製磁器 119-123. 青磁碗 124. 白磁坏 127-128. 染付碗 130-131. 染付皿 銅銭 138-183 かんざし 184

第17図

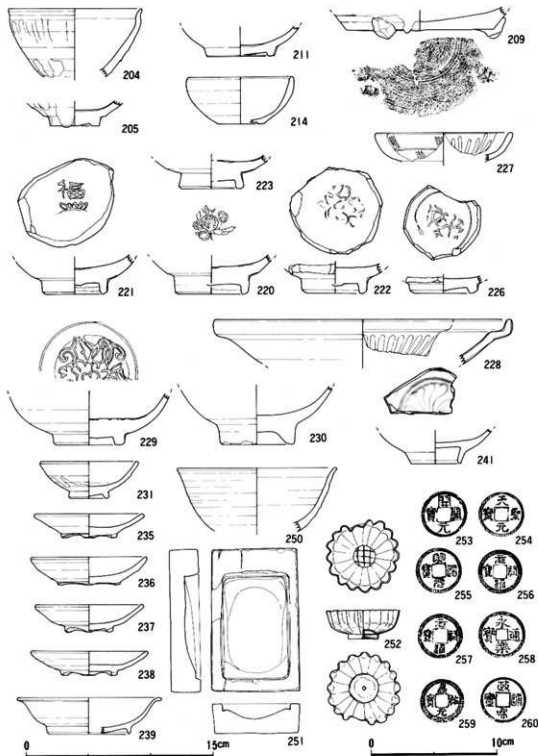
第50次調査・遺物(4)



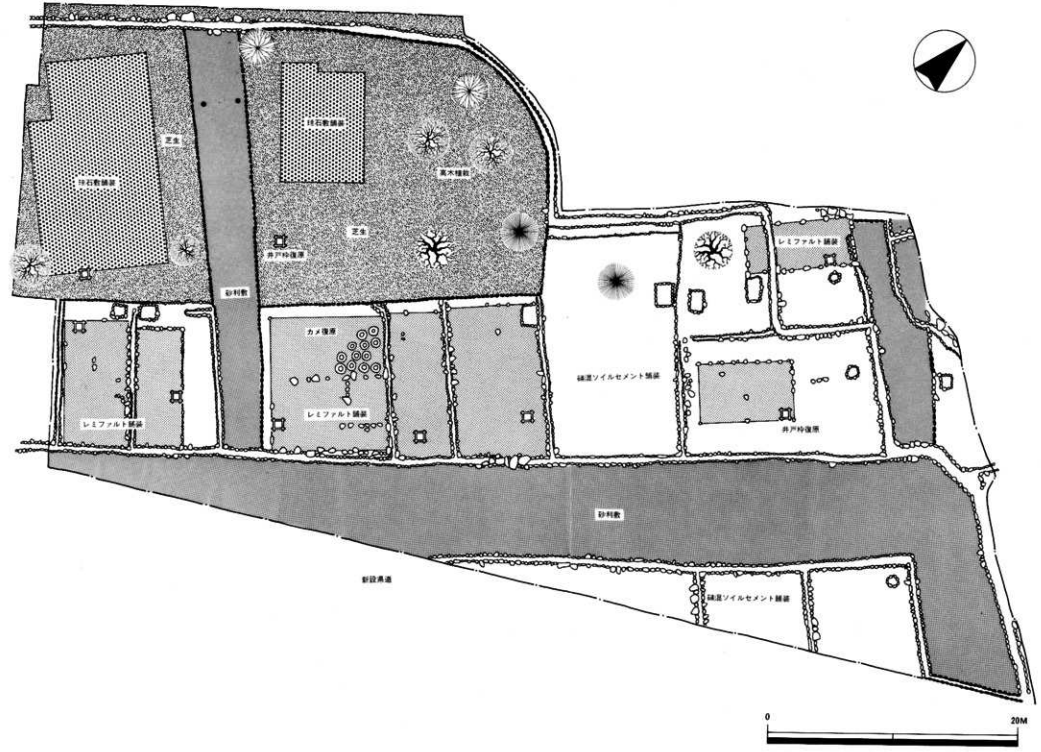
区画50-1 グループ4 越前焼 185-189. 甗 191・192. 壺 194-203. 搦鉢

第18図

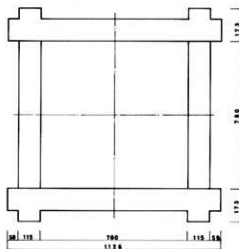
第50次調査・遺物(5)



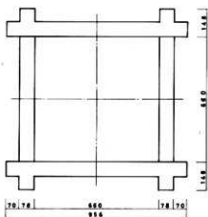
区画50-1 グループ4 美濃焼 204~208. 天目茶碗 209. 鉄軸鉢 211. 灰軸碗
 214. 漆塗小鉢 中国製陶磁 220~223. 青磁碗 226・227. 青磁皿 228. 青磁盤
 229・230. 白磁碗 231. 白磁杯 235~239. 白磁皿 241. 染付碗 朝鮮製陶器 250. 碗
 視 251 銅製菊皿 252 銅銭 253~260



第20図



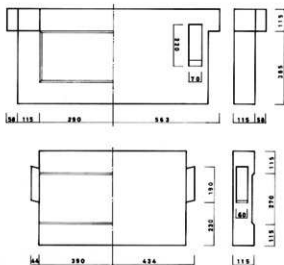
井戸枠



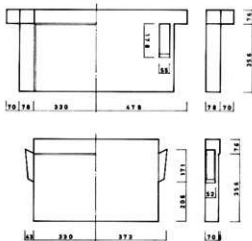
井戸枠



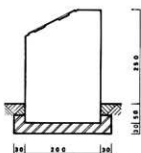
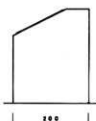
第44次発掘遺構整備工・井戸枠等



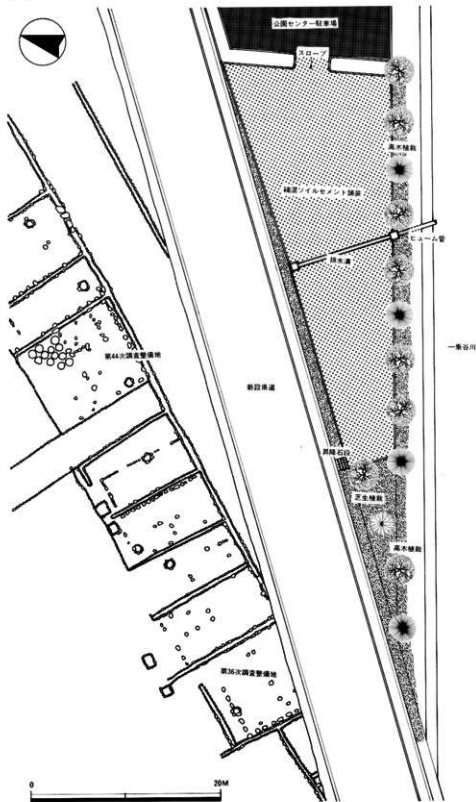
タイプ-A



タイプ-B



遺構表示石



特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡 XVI

— 昭和59年度発掘調査整備事業概報 —

昭和60年3月31日

編集発行 福井県立朝倉氏遺跡資料館©

印刷 河和屋印刷株式会社

無断転載を禁ず